# 心理面接におけることばと非言語表現の役割と調和について

2016 年 3 月

杉　嶋　洋　子

心理面接におけることばと非言語表現の役割と調和について

臨床心理学研究科
1000120201　杉嶋洋子

主　査　菅 沼 憲 治 教 授
副　査　末 永 清 教 授
副　査　長 田 由 紀 子 教授

目　　次

本論文の構成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第 I 章　　問　　題

1. 視　点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(1) 心理面接とは何か

(2) 介入のレベルと理論

2. 問　題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(1) 「客観性」とは何か

(2) 「正誤」とは何か

(3) コミュニケーションの方法としてのことば

(4) Saussure の言語学を背景としたことばの概念

(5) ことばの性質―社会性の功罪

(6) ことばの性質―相対性

(7) 社会的所産としてのことばの限界

(8) 描画の性質―肯定を示す

(9) 描画の性質―自然

(10) 固有の世界と一般的世界

(11) 対立物の調和

3. 研究の意義　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第 II 章　　背景理論

1. Carl Gustav Jung の理論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(1) 生涯のテーマとしての対立物の統合

(2) イメージを体験することによって個性化に向かう

(3) Jung とことば

(4) 「衝動」と「文化」

(5) 「道徳性」と「道徳律」

(6) 「個人」と「社会」

(7) エネルギー論

(8) 対立から調和へ―モデルとしての錬金術

(9) 調和をもたらす「容器」

2. Ferdinand de Saussure の理論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(1) ことばによって世界が切り分けられる

(2) 言語には差異しかない
(3) 言語の不変性と可変性
(4) 価値の相対性
(5) 対立～調和「弁証法的運動」
3. イメージについての理論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) 意識を発達させたイメージ
(2) 意識活動の第一歩―2 つの事象を関連付ける
(3) 物語性の誕生
(4) 様式化―抽象化の萌芽
(5) 観念の誕生
(6) はじめにイメージありき
(7) ヨーロッパにおけるイメージの発達
(8) イメージの性質―両価性
(9) イメージの性質―永遠性と可変性
(10) 多義性と超越性

第 III 章 先行研究
1. 臨床心理面接におけることば ・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) 詩的言語
(2) 科学的言語
(3) 深層心理学におけることば
(4) イメージとことばの関係
(5) 新たなことばを見出していく場＝心理面接
(6) ことばの背後にあるイメージの群れ
(7) 自己を囲む世界を構成することば
(8) 語用論からのアプローチ 一般意味論
(9) 一般意味論の心理面接への応用
(10) ことばと現地の関係
2. 臨床心理面接における非言語表現 ・・・・・・・・・・・・・
(1) 臨床心理面接における非言語表現の起源
(2) 非言語表現の有益性
(3) 非言語表現に関する先行研究
(4) 非言語表現の働き―象徴性による葛藤の超越
(5) 非言語表現の働き―言語表現への橋渡し
(6) 非言語表現の働き―「窓 channel」を見つける
(7) 非言語表現についての実証研究

① スクイグル線と内容の関連
② 風景構成法における関与状況と着目点の関連
③ スクイグル・ゲームにおける被験者 - 面接者の関係性と描画の関連
④ 描画の読み取りにおける専門家と非専門家の違い
(8) 実証的研究の限界

第 IV 章　目　　的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) 調和に至る過程
(2) 研究の方法
(3) 事例におけるクライエントの健康度の確認
(4) 各事例研究の目的
(5) 本研究の目的

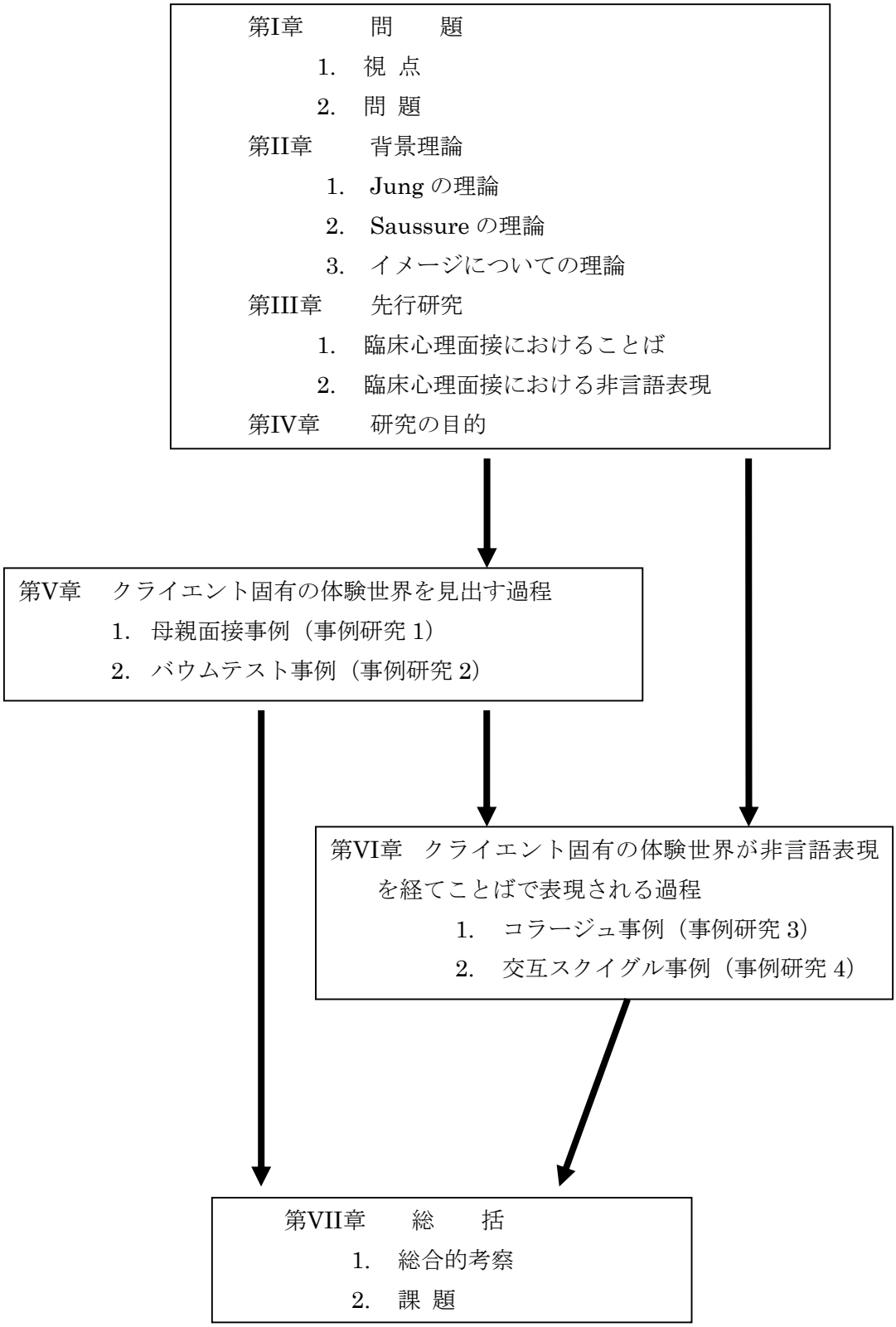
第 V 章　クライエント固有の体験世界を見出す過程
1. 母親面接事例（事例研究 1） ・・・・・・・・・・・・・・・・
2. バウムテスト事例（事例研究 2） ・・・・・・・・・・・・・・

第 VI 章　クライエント固有の体験世界が非言語表現を経てことばで表現される過程
1. コラージュ事例（事例研究 3） ・・・・・・・・・・・・・・・
2. 交互スクイグル事例（事例研究 4） ・・・・・・・・・・・・・

第 VII 章　総　　括
1. 総合的考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) 不適応とは何か
(2) 固有の世界と一般的社会
(3) セラピストの気づき－クライエントを理解するということ
(4) セラピストの問いかけ－「社会的所産」としてのことば
(5) セラピストの気づき－クライエント固有の体験世界にセラピストが触れる
(6) クライエントの試み－固有の体験を伝えることば
(7) クライエント・セラピスト間の共通語の創出へ
(8) 対立物を保持するあり方としての統合―調和―
(9) 容器としての面接の場
2. 今後の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

文献

本論文の構成


第I章　問　題
1. 視 点
2. 問 題
第II章　背景理論
1. Jung の理論
2. Saussure の理論
3. イメージについての理論
第III章　先行研究
1. 臨床心理面接におけることば
2. 臨床心理面接における非言語表現
第IV章　研究の目的
第V章　クライエント固有の体験世界を見出す過程
1. 母親面接事例（事例研究 1）
2. バウムテスト事例（事例研究 2）
第VI章　クライエント固有の体験世界が非言語表現を経てことばで表現される過程
1. コラージュ事例（事例研究 3）
2. 交互スクイグル事例（事例研究 4）
第VII章　総　括
1. 総合的考察
2. 課 題

# 第 I 章　　問　　題

## 1. 視　点

Carl Gustav Jung（1963/1973）は，「孤独は自己の周囲に人がいないために生じるのではなく，自分にとって重要と思えることを他に伝えることができないときか，自分が他人の許容し難い何らかの観点をもつことによって生じてくるものだ」と述べている。自分は「境界壁」が透明であるという「特性」をもつために，他の人には見えないものがある程度見え，多くを知る。それを，ほかの人々に知らせねばならないことが孤独を生み，そして，「個々人がその個性を忘れず，自分を他と同一視することのない時にのみ，真の交わりが生じるのである」と Jung は述べる。Jung の持つ，「『境界壁』が透明であった」という「特性」は，想像することしかできない。しかし，自分の体感している世界を他者に伝えられないことから生じる孤独というものは，いくらか自分にひきつけて想像することができる。そして，伝えられないことがあるということに目を向け，耳を傾けることは，その孤独に何がしかの変化をもたらす可能性があると考える。心理臨床活動において，クライエントは何らかの問題を抱えて，セラピストとの面接に訪れる。その多くは，他者との違和感に起因する。心理面接は，Jung のことばを借りれば，「その人にとって重要と思えること」や「他人の許容し難い何らかの観点」を聴く場であり，それによって「真の交わり」が生じ，「重要と思えること」や「何らかの観点」が他者に伝わり，受け入れられることを通して，抱える問題が変容することを目指す場と考えられる。

### (1)　心理面接とは何か

まず，心理臨床活動における“心理面接”という語について整理しておきたい。東山（2005）は，「臨床心理面接学」について「ある意味では心理療法とほぼ同じ意味概念を示している」と述べ，心理面接という語の経緯については以下のように解説している。「心理療法は外国語であるサイコセラピーの訳語であり，サイコセラピーを医師は精神療法と訳して使っている」，「サイコロジストとしては心理療法という言葉を使うのが普通ではあるのだが，『療法』というとサイコロジストが医師の領域を侵しているように感じられることもあるので，サイコロジストとしては心理面接と言う言葉を使うようになってきた」という経緯である。本研究では，この流れに倣い，心理臨床家であるセラピストが相談者であるクライエントを対象とした心理臨床活動を“心理面接”とよぶこととする。

では，その心理面接とは何であるか。河合（1967）は，心理面接を行う心理療法家について，「患者の発する Why に対して，それを How におきかえて答えることなく，その素朴な Why の前に立つことを余儀なくされたひと」であり，「視野を拡大することによって，つまり背後にある情動的なものに目を向けることによって」，Why に向き合っていくことが役割である，としている。ここでの「Why」は知的なものと情動的なものを含む捉え方を指し，「How」は物理学的な捉え方を指している。つまり，クライエントの「なぜ」に対し

て，その物理学的要因を答えて知的な納得を導こうとするのではなく，「人間の個々の情動に関する知見を基にしながら」，情動的要因に気づき，そこに関わることによって，「高次の平衡状態に至る」ことを目的とするのが心理面接である，というのである。また，西村と上里（1990）は，心理療法について，「訓練された専門家が，援助を求めてきた人に対して，厄介なものとなった感情や認知や態度や行動の変容をもたらすために，デザインされた職業的な人間関係である」と定義する。ここでは，心理療法を行うセラピストが「訓練された専門家」であり，特殊な技術を獲得していることを要件としている。河合（1967）が述べる「人間の個々の情動に関する知見」を有している人，と言い換えることもできるであろう。氏原（1992a）は，心理療法の場の特徴として，クライエントの抱える問題について，「心理臨床家が抱いているいっさいの観念，イメージ，経験が総動員され」，それがクライエントを動かし，さらに心理臨床家を動かすという場である，ことを挙げている。そして，「（クライエントとともにいる）1 時間が過ぎれば，臨床家は臨床家自身の現実に帰らねばならない」と述べる。一定の時間枠の中で，クライエントとセラピストの意識・無意識が相互に交流することが，他の日常的な場面と心理面接を分かつ点とも言えるのであろう。

これらの知見に基づくと，心理面接とは，“クライエントの抱える問題に対して，人間の個々の情動に関する知見を有するセラピストが，一定時間枠の中で，クライエントとセラピストの意識と無意識を相互に交流させながら，対象となる問題のより高次な平衡状態を目指す場”と言うことができる。本研究では，“心理面接”を上記のように定義する。

### (2) 介入のレベルと理論

では，心理面接における介入のレベル，つまり，どこに焦点をあてて面接を進めていくか。東山（1992）は，「心理療法の目的は，①症状の除去，症状の治療，②症状の背後にある人格を問題にし，究極的には自己実現をはかる，③こころと言うよりたましいへの接触をはかり，たましいの救済を考える」という 3 つに分類される，と説明する。東山の示す 3 つの目的は，分断されたものではなく，相互に関連するものではあるが，どこに視点を置くかによって面接の期間や方法も異なる。クライエントの抱える問題について「より高次の平衡状態」を目指す背景には，自己実現という課題がある。本研究では，「症状の背後にある人格を問題にし，究極的には自己実現をはかる」という介入レベルを想定し，そこに目標を据えて論じていくこととする。

また，「人間の個々の情動に関する知見」として，Jung の理論を手がかりとして進める。Jumg は，「その生涯を通じて，自分の中の対立物の調和の問題にかかわってきた」（Storr, 1973/2000）と評されるように，内向性と外向性のタイプ論，自我と影，アニマとアニムスなど，人間が自ずと抱える対立物と，それらの調和としての自己（self）について，生涯，研究を続けた臨床家である（Jung，1944/1976 ; 1955/1995 ; 1967/2002）。「対立物の調和」は，本研究の主題でもある。尚，本研究の主題については，後述する。

もう１つ，「人間の個々の情動」を推し量る上で必要となるのは，人間の体験世界への理解である。固有の体験世界を考える手がかりとして，Saussure（1915/1972；1910/2007）の言語理論を援用する。Saussure は，言語と対象は初めから結びついているのではない，混沌とした不分明なかたまりから言語によって対象が切り取られ，“もの”や“こと”となって立ち現れるのである，という論を述べた。ことばを切り取ることによって対象が生まれ，世界が作られるという哲学である。当然，切り取り方が異なれば，立ち現れる世界も異なる。たとえ，固有の体験世界というものが，多くの人の体験世界と異なったとしても，単なる主観的なものや心的なものとは限らないというわけである。そこから，ことばによって切り分けられた世界とは異なっても，現実に存在するものはあり得るということが導かれる。このことは，固有の体験世界を理解するために看過できない真理であると考える。

## 2. 問　題

### (1)　「客観性」とは何か

心理面接は，クライエントの抱える問題が高次の平衡状態に至ることを目指すのであるが，そこには，どのような課題が横たわるだろうか。

まず 1 つは，クライエントの抱える問題，あるいは問題とされている現象をどのように捉えるか，という課題である。たとえば「『境界壁』が透明であった」（Jung，1963/1973）ということについて，物理的に説明できないとなると，主観的なものや心的なものと見なされることになる。Karl Jaspers（1913/1971）は，精神病理学において区別をつけるべきこととして「客観的症状」と「主観的症状」を挙げた。Jaspers によると，「客観的症状」は感覚的に知覚でき，知的な思考によって了解でき，あとから検査し論じることができるものであり，「主観的症状」は，精神的なものの中へ心を移しいれること，患者（クライエント）の判断を媒介にして間接に聞き知り，あとから検査して論じることができないもの，である。この定義によると，「『境界壁』が透明」ということは，感覚的，知的ににわかに了解できるものではなく，検査し得るものでもないため，あくまで「主観的」なものと捉えられる。しかし，翻って「客観的」の根拠は何であろうか。たとえば，天動説が主流であった時代に，地球が動いていると述べれば，ごく主観的な感覚と捉えられたであろう。しかし，地球の自転が定説となった現代では，地球の動きを論じることは客観的事実に基づいた見解と受けとめられる。もう少し身近な例として，花粉症をとりあげてみたい。花粉症が一般的でなかった時代には，春になって“鼻がむずむずする。何か飛んでいるみたいだ”と言うと，“気のせい”，つまり主観的なものだと片付けられた。しかし，実際に花粉は飛んでおり，生体にアレルギーを引き起こしていることが物理的に証明されると“何か飛んでいる”は客観的事実となるのである。また，客観的・主観的ということは，物理的整合性に基づくだけではなく，文化や慣習にも左右される。たとえば，日本でよその家に上がる際に土足のまま入ろうとすると，“間違っている。そんなことも分からないのは，どうかしているのではないか”と言われる。しかし，靴を脱ぐのは寝るときだけという欧米では，人前で靴を脱ぐほうが“どうかしている”と言われるであろう。地動説と靴を脱ぐ習慣では，次元の違う問題と言われるかもしれないが，何をもって客観的事実とするかを考えるとき，客観性とは，すなわち一般性と強い関連があるのではないか，という点を問題として提起したいのである。「客観的」を辞書（新村，1998）でひくと，「特定の個人的主観の考えや評価から独立して，普遍性をもっていること」とある。しかし，少なくとも心理面接で扱うことがらが，人間の五官を通して感受したものであることを考えると，「個人的主観」から独立であること，は困難とも言えよう。では，臨床心理学における客観性とは何か。氏原（1992b）は，臨床心理学が「学」である以上，「ある程度以上の客観性を必要とする。万人の納得する，かつ万人に通用する一般性がいるのである」と述べる。

ここで再び，客観性が一般性と関連が深いことに行き着く。もし，客観的と言われることが，“一般的”であることと重なるのであれば，主観的と捉えられることは，単に“まれ（稀）”であることに過ぎないのではないか。となると，“客観・主観”という区別は，“多数・少数”と置き換えられるのではないか，と考えられる。そこから推論を進めると，もしかしたら，多くの人に否定されることでも，実際に“在る”という可能性も生じてくる。これは，妄想を信じるべきだとか，心的現実に共感するべきだということを示したいのではない。多くの人が感覚的に認められないからと言って，この世に存在しないと断定することはできないのではないか，という問題提起である。

この問題を考えるにあたって，言語学者 Saussure（1915/1972）の世界観が手がかりとなる。不分明なかたまりをどのように切り取るかによって，立ち現れる世界は異なる。見える世界がただ１つとは限らないのである。なぜ，そこに注目するかというと，“もしかしたら，多くの人が気づいていないけれども，実際にそこに在る，ということが，世の中にはあるかもしれない”，という視野を，少なくともセラピストは持つことが必要である，と考えるからである。なぜなら，クライエントの述べること（現象）を「主観的」なものと捉えた時点で，そこに付随するクライエントの感情的経験や苦痛に近づくことが難しくなるからである。ある現象についてクライエントが“気づいてもらえない”という悲しみや悔しさを訴えたとき，その現象が非現実な心的事実であるという前提で聴くと，セラピストは，非現実を信じるクライエントの心的機序を理解しようとするにとどまる。異なる場所に立っていることに気づけば，少しでも近づいて同じ景色を見ようとするであろうが，同じ景色を見ていると思いこんでいるセラピストは，その先へ進めないのである。

セラピストがその先に踏み出すためには，まず自分の立ち位置に目を向けなければならない。クライエントの見る景色を非現実と捉えるセラピストの感じ方や考え方は，何を基準にしているのだろうか。自分が前提としている知識や思考のほうが，偏っている可能性はないか，と自問することから，自分の立ち位置を知ることが始まるだろう。そうして初めてクライエントの感情に近づけるのではないかと考える。セラピストが，自身の有する客観的・主観的という準拠枠はどのようなものかを自問し，自覚することが，まず重要であると考える。

以上のような観点から，本研究では，クライエントの経験する現象や叙述の内容について，客観的・主観的という二項の対比でなく，一般（多数）・固有（少数）という二項の対比を用いて捉えていくこととする。

### (2) 「正誤」とは何か

客観・主観という視点が孕むもう 1 つの問題は，正誤や善悪など評価の問題である。前段で述べた地動説の例で考えると，天動説が主流であった時代には，地球が動いているという説は誤りとされた。一般的でないことが主観的なものとされ，誤りであると判断されたのである。また，靴を脱ぐ習慣の例では，日本でよその家に土足で上がると大顰蹙をか

い，失礼なこと，悪いこととされる。しかし同時代であっても，欧米では家の中で土足は当たり前で正しい行為であり，靴を脱ぐほうが怪訝な顔をされる。このように，世の中のものごとの正誤や善悪が，一般的であるか否かという判断基準でふるい分けられているのである。正しいか誤りか，あるいは良いか悪いかといった評価や価値が，一般的であるか否かという物差しで区別され，世界の中に位置づけられる。それはいつの間にか，そのものの持つ性質であるかのように錯覚されていく。土足で家に上がるという行為が“良くない行為”とされると，次第にその行為をした人を“良くない人”“常識をわきまえない人”と見なすようなことが起きる。もともと多数か少数か，一般的か稀有かの違いであったものが，正しいか誤りか，良いか悪いか，といった評価を規定し，その性質であるかのような色づけがなされてしまうのである。

この問題は，不適応ということを考える上で，心理面接と密接に関わってくる。人間は一定の社会集団，共同体の中で生活する。共同体は，おおよそ生活する人間の多数派に合わせて営まれる。そのため少数派にとっては，生活のしにくさも生じる。たとえば身長が160 ㎝以上の人間が多数派であれば，扉も看板もその目線に合わせて作られる。そうなると身長 120 ㎝の人間には不便なこともあるだろう。不便さは適応のしにくさにつながることもある。場合によっては，不適応状態に陥ることも想像できる。想定された基準から外れていることによって，一般的でないもの，規格外のものとなり，それが社会適応を難しくするのである。ここに，一般的でないことが，正誤や善悪など価値へとスライドする傾向が加わると，もともと多数か少数かという量的な問題から発生した不適応状態が，誤ったもの，悪しきもの，という質的な問題であるかのように受け取られてしまうのである。このような問題の本質を見誤ることなく捉えていくことが心理面接における課題の 1 つである。

### (3) コミュニケーションの方法としてのことば

次に横たわる問題は，この“心理面接”において，どのようなコミュニケーションが求められるか，つまり方法についてである。河合（1993）は，「人間にとってのコミュニケーションの主たる媒体は言語であり，心理療法においても，言語によるコミュニケーションによって行うものが主であると思われる」とし，「非言語アプローチも心理療法においては重要であるが，そこに体験されたことについてクライエントに伝えたり，あるいはその方法の意味について一般に伝えたりするときは言語を用いねばならない。このような意味で，心理療法にとって，『ことば』の問題を無視してとおることはできない，と言っていいだろう」としている。そして，心理療法の場では，「事実を正しく伝える，というよりも『体験』を伝える」こと，それによって「わかってもらう」ことが大切である，と述べている。

しかし，体験を伝えることは容易ではない。そもそも「ことば」とはどのようなものだろうか。

### (4) Saussure の言語学を背景としたことばの概念

Ferdinand de Saussure（1915/1972）は，「思想は，それだけ取ってみると，星雲のようなものであって，そのなかでは必然的に区切られているものは一つもない。予定観念などというものはなく，言語が現れないうちは，何一つ分明なものはない」と述べて，それまでの伝統的言語観である《言語命名論》(丸山, 2008) を否定した。そして, 言語活動（*langage* ランガーシュ）と言語（*lange* ラング）と発話（*parole* パロール）を区別し，言語を聴覚イメージ（*signifiant* シニフィアン）と概念（*signifie* シニフィエ）の 2 つの要素から構成される記号（*sigune* シーニュ）と捉えた（Saussure，1910/2007）。

Saussure の言語観の中核は，ことばによって世界が形作られた，ということである。それまでの言語観は，もの（対象）がまず存在し，ことばはそれにつけられた名前であるという捉え方であった。それに対し Saussure（1915/1972）は，もともと何ものにも分かたれていなかった固まりから，ことばによって対象が切り取られ，“もの”が生まれる，という過程を論じた。人間が恣意的に作ったことばによって“もの”が立ち現れ，そのようにして誕生した“もの”や“こと”から概念が作られていくのである。そしてその概念を基に，人間は思考し世界を体系づけていく。世界の体系をつくる基が，人間の恣意によって作られたものであるならば，異なる切り取り方をすれば，異なる世界が立ち現れると考えられる。Saussure の言語観に沿って考えると，客観的唯一無二の世界というものは存在しない。普段，多くの人が日常的に接している世界は，その共同体を営む人々に共有された概念体系としての「言語（*lange* ラング)」に基づいて展開する世界に過ぎない。いわゆる一般的世界であって，真に客観的とは言えないのである。実際に，異なる言語体系の土地に行くと，日の昇る時間が異なり，車の走る方向が違う。挨拶，食習慣，育児，動植物の扱いが異なる。まさに世界が違うのである。逆に同じ土地であっても，異なる言語習慣を持ち込んだならば，見える世界が異なるであろう。切り取り方によって立ち現れる世界は異なるのである。このことは，先述した“客観的・主観的という捉え方を，一般（多数）・固有（少数）というカテゴリーで捉えなおす”という視点を導くものである。

本研究では，Saussure の言語論の定義をもとに，言語活動 *langage*，言語 *langue*，発言 *parole*，聴覚イメージ(能記)*signifian*，および概念(所記)*signifie*，を含む，言語学の対象を包括する概念として“ことば”という語を用いることとする。

### (5) ことばの性質—社会性の功罪

さて，ここで，人間とことばの関係が問題となる。能記(*signifian* 名づけるもの)を所記(*signifie* 名づけられるもの)と結びつける紐帯は，「恣意的」である。当然そこから生じた全体である言語記号は「恣意的」なものである。けれども「逆に，これを用いる言語社会との関係からみれば，自由ではなくて，押しつけられている」（Saussure，1957/1971）とい

う関係になるのである。このような，ことばと人間の“関係”が見落としてはならない点であろう。つまり，ことばは，もともと人間が自由に創り出したものであるが，ひとたびことばとして選択されてしまうと，容易に「変えるわけにはいかぬ」ものである。たとえば，“朝”ということばの意味を，夜明けから太陽の南中までを指すと決めた場合に，それを勝手に自分だけが“昼”とよぶわけにはいかなくなるのである。選択されたことばは共通認識として一般性を帯びていく。そして，“朝”ということばによって，夜明けから南中までを 1 つの単位として捉える見方が生ずるのである。さらには、時間という区切りが加わり，一定の“時間”が作業や行動の基準となっていく。そのように，社会的所産として成り立ったことばによって，人間はものの見方を規定され，表現の仕方や行動も規定される。果てしない連続体に区切りをつけたことによって，その区切りの範囲で“もの”を捉えるようになっていくのである。多数の人間が同様の捉え方をすることによって，それは一般的なものとなり，社会の共通認識を形成し社会的習慣や規範となっていく。やがて人間はその規範をもとに共同体を維持運営していくようになる。もともと恣意的であったものが般化され，ものごとの前提となっていくと，それは初めから存在していたかのように自明なもの，客観的なものとして扱われるようになる。ことばが社会的所産であることを考えると，一般社会で通用することばが，一般的多数派のものごとを伝えるためには有用であるが，少数派である個人の固有の体験を表現するときには，当てはまることばがなく，不自由な場合があると想像できる。言語体系と異なる体系で把握した世界は，それを示す適切なことばがないため，他者に伝える術を失うのである。

ことばが恣意的なものであり，一定の共同体内で通用するルールであることについて，鈴木（1973）は，数々の具体例を示している。たとえば，日本語の「水」と英語の「water」を比べると，「水」は「湯」と異なり，「冷たいという性質をかなりはっきりと持っている」が，「water」は，「情況次第で『水』のことにも『湯』のことにも使う」。また「唇」と「lip」の違いに触れ，「鼻の下」を直接指すことばを持たない言語があることを指摘する。ここで重要なことは，「そこにものがあっても，それを指す適当なことばがない場合，そのものが目に入らないことすらある」（鈴木，1973）ということである。たとえば，様々な色名を知っている画家は，朱色と紅色を区別するであろうが，色の基礎名しか知らない人であれば，どちらも赤として捉え，違いは確かにあってもそれは目に入らないということが生じる。今井（2010）は，ことばと認識の関係について実証研究を行い，名詞を可算名詞と不加算名詞で区別する英語話者と加算か不加算かを区別しない日本語話者を比較した。そして「どの名詞についても，必ずそれが加算なのか，不加算なのかを，明らかにしなければならないという英語の性質が，初めて聞く名前の意味を考えるときに，形に注目するように英語話者にバイアスをかける」という結果を得ている。そのように，ことばは認識に影響を与え，属する共同体内で通用する概念や思想などの思考体系，つまり世界像を作り出していくのである。

### (6) ことばの性質—相対性

そしてもう１つ，Saussure（1915/1972）が強調することは，ことばが示すのは実体ではないということである。「言語には差異しかない」「言語がふくむのは，言語体系に先立って存在するような観念でも音でもなくて，ただこの体系から生じる概念的差異と音的差異とだけである」（Saussure，1915/1972）と言う。ことばが示すのは，「それである」という何かではなく，それ以外の何かとは異なる，という否定であり，他のものとの差異なのである。たとえば，“少年”ということばについて考えてみる。児童福祉法で少年という場合，小学校就学から 18 歳未満を指し，性別は問わない。一方，少年雑誌という場合は，対語として少女雑誌があり，少年は成人に満たない男性を指す。これは，“少年”ということばが，“少年とはこれこれである”という実体を示すのではなく，“成人ではない”“乳幼児ではない”，あるいは“少女ではない”などのように，“他の○○ではない”という差異を示しているに過ぎない，という性質からきている。もし，ことばが実体を示すのであれば，そのことばが示すものは文脈や用い方によって異なることはなく，“少年”は，どの文脈においても一定の意味を示すはずである。けれども，実際には，１つのことばが時と場合によって異なる意味に使われているのである。Saussure（1915/1972）は，ことばが示す価値についても相対的なものであることを述べた。たとえば，将棋の王将は，将棋の盤上では，いちばん高い価値を持つ。しかし，王将は，棋盤を離れると１つの木片に過ぎない。王将ということばが示す価値は置かれる状況によって異なってくる。ことばが示す価値は，時や場所，関係，文脈といった状況に左右されるごく相対的なものなのである。

Saussure は，多くの具体例から，言語というものが指し示すのは，その実体ではなく他のものと区別する「差異」であり，そのことばが示す価値も絶対的なものではなく相対的なものである，ということを指摘したのである。

### (7) 社会的所産としてのことばの限界

体験を他者に伝えるためには，ことばの社会的側面が有用である。一方で，体験は，その個人の，五官で捉えた感覚と経験による固有のものを多く含む。Jung（1963/1972）は，「夢やヴィジョンを含んだ内的体験」に意味を見出し，「内的な体験はまた，私をめぐって起こり，若い時，あるいはそれ以後私に対して重要なもののように見えた外界の出来事をおおい隠した」「外的の出来事は内的な体験の代わりにはならない」と述べ，個人の「内的な体験」に価値を置いた。社会的所産としてのことばを有していたとしても，Jung（1963/1973）の述べるように，「他人の許容し難い観点」や「内的な体験」を伝えるのは難しいであろう。ことばがその社会集団における一般性つまり多数決としての共通認識を形成していく一方で，「他人の許容し難い何らかの観点」という共通性の低い認識は脇に押しやられる。そういった共通性の低い，あるいは他者と共有されない固有の認識が他者と共有されるためには，ことばとは異なる媒体が必要になると考えられる。

### (8) 描画の性質—肯定を示す

ことばではないもの，ことばと異なるものとして非言語表現が考えられる。非言語表現の１つ，描画について，Wittgenstein（1961/1975）は，像が「実情-で-ない-こと，を描出する場合，描出は専ら，実情とはならなかった当のことを像が描出することによって，なされる」と述べる。そして「『どうではないのか』との問いへの解答は，まさしく肯定命題だからである」と続ける。つまり，像（ここでは描画を指す）は，「否定」を表すことができない，というのである。たとえば“赤ではない色”と伝えたい場合，それを描画で示そうとすると，黄色や緑，青…と様々な色を示すしか表しようがないのである。それは“赤ではない”ということを示すのではなく，たとえば“黄”“緑”“青”という具体例を示すことになる。つまり“赤ではない”という否定的命題が，“たとえば，このような色である”という肯定的命題として示されるのである。Saussure（1915/1972）が，「差異しかない」と述べる「言語」とは対照的である。Wittgenstein の指摘するように，描画（像）が肯定を表現するものであるとすれば，差異を示すことばによって表現され得なかったものが描画によって表される可能性が考えられる。

### (9) 描画の性質—自然

描画によって表現されるものは何であろうか。Jung（1963/1972）は，内的イメージを描くことについて「それは自然そのものだ」と述べる。この「自然」というのは，理論枠組に拠る科学や他者へのメッセージ性を持つ芸術作品とは異なるという意味である。イメージを描くことは，価値や功利的なものとは異なる，自発的で自然なものであるというのである。ここで，内的イメージとはすなわち無意識に属するものや心的事実と言われるものと考えられる。たしかに描画を含む非言語媒体はそういった目に見えない内的イメージを表現するものとして着目されることが多い。それは非言語表現の重要な特徴でもある。しかし，“他者の目に見えないものは現実ではない，当人の心的なものである”という考え方は，“事実は 1 つであり，客観的な(私の)目に見えるものは誰にとっても見えるはずであり，(私の)目に見えないものは存在していない”という前提に基づいている。

本研究の趣旨は，その前提に対する異議である。

描画が示し得るものは心的イメージだけではない。もし，“一般的に認められないもの，客観的とはされないもの”が描画に示されたとして，それが，実際には存在しないものと言えるだろうか。前述したように，客観性とは一般性と重なるものと考えられる。そこから導き出されるのは，客観的でないとされるものでも，一般的ではないだけで，現実に存在しているものも在るという仮説である。非言語表現はことばにできないものを示すことが可能であるが，ことばにできないものイコール存在しないもの，ではない。“存在しているがことばにできないもの”を非言語表現は示す可能性があるのである。目に見え，体感し，存在もしているが，ことばにできないもの，一般には共有されないが確かにそこにあるものを，描画は示すことができるのである。目に見え，存在もしているが，ことばにで

きないもの，一般には共有されない固有の体験世界を，非言語媒体から見出していくことが心理面接の重要な役割と考える。

中井（1985 a ）は，絵画や粘土などの「芸術療法」について「何かを語るのではなく『示す』ものである」と述べている。そして，「正否はなく，“了解可能性”の限界もなく」「巧拙もない」ことを特徴として挙げた。描き手によって示されたものは，いわゆる社会的な価値基準のふるいにかけられることなく，受け手に届けられることが可能なのである。

**(10) 固有の世界と一般的世界**

クライエントが体験しながらも，ことばでは表し得なかったものがことば以外の媒体によって表現され，他者であるセラピストと共有されることができれば，クライエントの固有の体験が，他者に向けて開かれることも可能になると考える。それは，それまで存在自体を認められていなかったものが，存在するものとして目を向けられることにつながる。しかし，それだけでは，クライエントの“固有の体験世界”と“他者と共有される一般的世界”が「高次の平衡状態」に至ったとは言えない。一般的世界と関わりを持つためには，やはり社会的所産としての“ことば”を有し，ことばによって固有の体験世界を伝えることが必要であろう。

そういった意味において，セラピストは，クライエントの固有の世界を理解するにとどまっていたのでは道半ばである。クライエントが固有の体験世界を伝えることのできる“ことば”を共に創り出すことが，目指すべき課題であろう。そして，固有の体験世界を示すことばが，セラピストと共有されることがあれば，他者に開かれたものとなり，社会的側面を帯びていく可能性を持つのではないだろうか。もちろん，“固有の体験世界”と，“一般的世界”は，分断されたものではなく，連続性のあるものとしてひとりの人間の中に存在する。それは，意識と無意識が連続的に捉えられ，しかし時には相反するものとして作用する，という関係に準えて考えることができるだろう。そのような，固有の世界を表現しつつ，他者と共有できることばが，体験を伝えることばであると考える。

**(11) 対立物の調和**

クライエント固有の世界が他者に開かれることは，固有の体験世界が失われることではない。Jung（1916/1977）は「肝腎なのは，反対物への転化ではないのだ。その反対物を承認しながら，以前の諸価値を保持すること」と述べる。ここで，Jung の述べる「反対物」「対立物」という概念について，Saussure（1915/1972）の言語論をもとに考えてみる。「対立物」というのは，もともと不分明なかたまりの中で混沌として存在していたものの一部が，（たとえばことばによって）恣意的に切り取られることによって，切り取られなかったものと区別され，「切り取られたもの」と「そうではないもの」として対立的に捉えられるようになっていったものと考えることができる。先述の色の例で考えると，青とも赤とも言い得る曖昧な色相を「青」に分類した途端に，「赤」は「青ではないもの」として対立的

に捉えられる。もともと青も赤も含む混沌としたかたまりの中では，両者は対立的なものではなかった。しかし，1 つを切り取った途端に対立物が生まれるのである。対立物の起源から推察すると，両者はもともと対立的なものではなく，調和し得る要素を充分に持っていると考えられる。しかし，ひとたび，混沌の中から切り取られると，それは容易に変えることはできなくなり，逆にそれに縛られていくということが起きる。対立物の調和とは，対立物の各々が内包する，調和し得る要素を再び見出し，活性化するという過程でもある。つまり，対立物の調和とは，固有の体験世界を持った個人が，他者に開かれつつ，一方で固有性も保持しながら，さらなる「高次の平衡状態」に近づくことを意味するのである。描画が示す肯定の世界と，ことばによって示される差異の世界の双方に関わり，相互に作用するあり方が，「平衡状態」であると言えよう。それは，一方を排除したり，2 つを混合して 1 つにするのではなく，双方が確かに存在しつつ調和する在り方である。そして，対立と調和の過程を重ねることが，個性化の過程，つまり自己実現に向かう道程であると考える。

### 3. 研究の意義

以上のような観点から，心理面接における，一般（多数）と固有（少数）という対照的二項について，ことばと非言語という対照的二項を用いることで，高次の平衡状態，すなわち対照的二項の調和に至ることが可能になると考える。その過程において，ことばと非言語表現は，それぞれどのような役割を持ち，どのように作用し合うのだろうか。それらを見出すことによって，クライエントの固有の体験世界へのさらなる理解と，セラピストの在り方への新たな示唆を提供すると考える。

# 第 II 章　　背景理論

対立的事項の調和を目指すにあたって，対立物の統合を主題とする Jung 理論が道標となると考える。全体を包括する臨床心理学的理論として，Carl Gustav Jung（1875-1961）の理論を基盤とする。また，一般的世界と固有の体験世界との関係を考える上で重要な示唆をもたらす理論として，構造主義言語学の開基といわれる Ferdinand de Saussure（1857-1913）の言語理論をもとに論を進める。ことばと非言語表現をつなぐものとしてのイメージについては，民俗学者の木村重信（1925-），Mircea Eliade（1907-1986）の理論をもとに捉える。

## 1. Carl Gustav Jung の理論

イメージの力に注目し，人間の無意識におけるイメージの作用について，Carl Gustav Jung は多くの理論と概念を顕した。

### (1) 生涯のテーマとしての対立物の統合

Jung は，精神科医となった初期には，Freud，G. の精神分析と夢分析の技法に多くの示唆を得ており，臨床場面で経験したことが Freud の抑圧の機制についての理論と合致することに関心を寄せていた（Jung，1963/1972）。しかし，抑圧の内容については「フロイトに同意できなかった」（Jung，1963/1972）ため，その後，分析心理学として独自の理論を確立していく。Storr，A.（1973/2000）は，Jung と Freud について，「極端に単純化するなら，フロイトの主たる興味は秘密を発見することにあり，一方，ユングのは，心の中で葛藤している『人格』を調和せしめることにあった」と捉えている。そして「ユングはその生涯を通じて，自分の中の対立物の調和の問題にかかわってきた」と述べている。この対立物の調和という観点は，主観と客観，内向性と外向性のタイプ論，自我と影，アニマとアニムス，などの対立物を見出し，それらを調和へと向かわせるものとして，「自己（self）」のはたらきや錬金術（Jung，1944/1976，1955/1995，1967/2002）など統合の概念へとつながっていく。河合（1988）によると，Jung は「人間の意識も無意識も含めた心の全体性に注目し，そのような心全体の統合の中心としての『自己』の存在を仮定」した（河合，1998）。

Jung は，対立物が向かう調和の中心として『自己』を仮定したが，それはイメージとして存在し，シンボルを通してのみ具現化されるものなのである。そして，その『自己』に向かう歩みを「個性化」ということばで表した。

### (2) イメージを体験することによって個性化に向かう

Jung にとって「イメージ」は，非常に強大な力を持つものである。自己について，「そのイメージは，圧倒的な力をもった生き生きとした存在」であって，解釈は及ばず，「われわれ自身すらその中の一部であるようなイメージ」でもあると述べる（Jung, 1928/1995）。また，第一次大戦を前にして自身に生じた混乱について，「情動をイメージにと変換する―つまり，情動の中にかくされていたイメージを見出す―ことができた限りにおいて，私は静められ，安心させられた」（Jung，1963/1972）と記している。

Jung の想定する「イメージ」は，人間自身を滅ぼす脅威となる一方で，混乱から救う導き手ともなる偉大な力を持つ生きた存在でもある。

そして，イメージは，個性化への道を開くものでもある。Jung は，ラヴェンナを訪れたときに体験したアニマとの対決について，「かつて無意識内容だったものを意識に統合する

場合，その人自身の内部で何が起こっているか，言葉で記述することはほとんどできない。それはただ経験されうるだけである」と述べている（Jung，1963/1973）。つまり，個性化は，イメージを体験することによって進められるのであるが，それは必ずしも意識されるものではない。無意識内容はイメージとして当人に立ち現れる。それは知らず知らずその道を歩む，という体験のされ方であったり，不合理な決断をしてしまうという体験のされ方であったりする。そのようにして，人はイメージを自ら体験することによって，無意識内容が意識に統合されるというのである。そして，その結果として個性化に向かうのであり，その個性化の過程が自己実現の道であるとJung（1928/1995）は考えたのである。

### (3) Jungとことば

体験が言葉にされないとき，それが他者に理解されるのは困難を伴う作業であろう。Jung（1963/1973）は，「孤独は自己の周囲に人がいないために生じるのではなく，自分にとって重要と思えることを他に伝えることができないときか，自分が他人の許容し難い何らかの観点をもつことによって生じてくるものだ」と述べている。Storr（1973/2000）は，Jungについて「彼が自分自身を，容易に理解しうることばで表現する能力に欠けていた」と指摘している。興味深い指摘であり，実際，Jungの著述から，その体験を理解しようとするのは容易ではない。けれども，もしStorrの指摘が的を射ていたとして，Jungが「言葉で記述することはほとんどできない」と述べたのは，Jung自身の表現能力の問題のみに拠るのだろうか。ここで，ことばについて，近代言語学の祖とされるSaussureの指摘が思い起こされる。Saussure（1910/2007）は，言語活動*langage*は言語*langue*と発話*parole*からなると考え，言語とは「言語活動の社会的所産」（Saussure，1915/1972）と捉えた。ことばはものの見方を形成し，「そこにものがあっても，それを指す適当なことばがない場合，そのものが目に入らないことすらある」（鈴木，1973）のである。社会的規定を受けている「ことば」では，社会的規定を受けない個人的心も集合的心も表し得ないということだったのではないかと考える。

### (4) 「衝動」と「文化」

Jung（1916/1977）は，「文化とは人間の内部にある動物的なものを次第に馴致して行くことである」と述べ，その過程は「自由を渇望する動物的本性の側からの憤怒を呼ぶことなくしては遂行されない」としている。この著書の前章で，Freudによる神経症の根源が性愛的葛藤であるという洞察について書かれており，ここでの「動物的なもの」は性愛的葛藤に端を発すると予想される。しかし，続いて「文化の強制と不和の関係にあるのが決していつも動物的な衝動ばかりとはかぎらず，新しい理念もやはり文化の強制との不和になることが往々にしてあるということを知っている。新しい理念というものは，人間の心の無意識界から，明るい陽光の中へ押し上がってきて，人間の衝動同様に，その時々の支配的文化と葛藤を惹き起こすものなのである」（Jung，1916/1977）と述べている。後段で

「集合的無意識」についての叙述があるように，Jung は，「文化の強制」との葛藤を惹き出すものとして，性愛衝動に代表される「動物的本性」のみならず，「新しい理念」をも含む，非常に広範で普遍的なものを想定していたと考えられる。

### (5) 「道徳性」と「道徳律」

Freud の精神分析によって動物的衝動が解放され，禍をもたらすという懸念に対しては，人間の衝動にブレーキをかけるのは人間の道徳性であると説明している。Jung は，道徳性と道徳律は異なるものであるとして区別した。「道徳というものは，人類とともに古い人間の魂の一機能であり，外から押しつけられるものではなく，結局先験的に人間が自己自身の中に持っているもの」（Jung，1916/1977）であり，それが道徳性であるとしている。それに対し，「道徳律（種々の道徳的掟）は共同生活を行う人間集団の内部においてのみ通用するものである」（Jung，1916/1977）と述べる。衝動を意識化することは「しかるべき意味をもった一つの全体のうちに秩序づけようがため」（Jung，1916/1977）なのである。人間の衝動に目を向けることは，道徳律という物差しで見ると「禍」であり危険な行為となるが，人間が本来持っている道徳性を発揮するためには重要な過程となるのである。

### (6) 「個人」と「社会」

個人と社会の関係について Jung（1928/1995）は，「全体としての社会の倫理性がその社会の大きさに反比例するということは，周知の事実である。個体が集まれば集まるほど，ますます個人的要素は消され，それとともに，もっぱら個人の道徳感情と，そのために不可欠な自由にもとづいている倫理性も消滅するからだ」と述べている。身の回りの些細なことを判断するときは個人が自分の意思で決定するのに対し，自分の属する集団なり社会なりの問題となると個人の意思ではなく規則や前例を優先するという例は日常的に経験する。さらに共同体全体の問題となると，その傾向は一層強くなり，そこに属する個々の思いとは離れた決定がなされるということが起きる。Jung は，第一次世界大戦を経験し，人間が倫理性を欠いた判断を下すに至る経緯を明らかにし，警告をしたのである。では，個々の道徳感情や倫理性を失わないための手立ては何か。Jung（1928/1995）は「個々人は，たったひとりで行動しているときよりも，社会の中にいるときのほうが，ある意味で無意識的により劣った人間」であるとし，だからこそ「個人的内容と集合的心の内容とを明確に区別すること」が必要である，と述べる。そして，「個人の彼岸に社会があるように，私たちの個人的な心の彼岸には集合的な心がある」，「それがすなわち集合的無意識」であると言う。「社会的な機能や本能が，個々の個人の利益と対立するように，人間精神も，その集合的な本性ゆえに個体の必要とは対立する，ある種の機能や傾向を持っている」のである。しかし，「この区別がなかなか容易でない。なにしろ，個人的なものといえども集合的心から育ってきており，それと密接に結びついている」（Jung，1928/1995）のである。人間が普遍的に備えている心性が集合的心すなわち集合的無意識である。個人の中に必ず

それはあり，個人的心もそこから派生し成長したものである。そのため個人的心と集合的心は対立的であると同時に親和的要素を持つのである。人間は，個々の意志に反するような判断を招く心性を生来的に自分の中に備えているのである。

### (7) エネルギー論

このような，個人と社会，あるいは個人的心と集合的心，といった対立軸が提示され，そこに葛藤が生ずると考えるのであるが，この対立がエネルギーの源泉となる。Jung（1916/1977）は「対立緊張のないところにエネルギーはない」と考え，その対立物を発見することが重要であるとした。「高きはつねに低きを求め，熱は冷を求めるように，あらゆる意識は，それと察することなくして自己の無意識の対立物（これなくしては意識が活動をやめ，化石化してしまうところの）を求める」と述べる。1 つの面が顕在化すればするほど，対立する影も濃くなる。その影の部分に向かってエネルギーは流れ込むというのである。エネルギーそのものは「中立的」なものであるが「エネルギーはどんなに沢山あろうとも，そのエネルギーのお気に召した斜面を作ることに成功しないうちは，われわれはそのエネルギーを有効に利用することが出来ない」（Jung，1916/1977）という。集合的心に同化し，社会適応がうまくいけばいくほど，人間はその方向に傾注していく。一見，成功を収めたと思えるうちに，自らそれを打ち壊してしまうような行為に至る例に出遭うことがある。個人的心と集合的心の乖離が進めば進むほど斜面の傾きは大きくなり，エネルギーは一気に流れ込み，威力を発揮するのである。

### (8) 対立から調和へ—モデルとしての錬金術

そして，Jung（1955/1995）は，その対立軸から生み出されたエネルギーが調和へと向かう過程を中世の錬金術の中に見出した。Jung（1956/2000）は，錬金術師である「いにしえの達人」が「鉄と銅の『合金』，あるいはまた S〔硫黄〕と Hg〔水銀〕の結合ということをいっている場合，彼はそれによって同時にある象徴について語って」おり，「Fe〔鉄〕は同時にマルスであり，Cu〔銅〕はウェヌス〔ヴィーナス〕であって，それゆえこの二つのものの融合は同時に恋愛」でもあり，「Hg と S との結合の結果は『沐浴』と『死』」である」と捉えた。それゆえ，錬金術師たちが結びつけようとした物質は，「ある程度ヌミノースな性格をおびて」おり，「それは相手を『受胎させ，それによって哲学者たちの求める生きものを産み出す』物質であった」と考えた。Jung（1967/2002）が，錬金術に注目したのは，薬剤を自然界の素材から抽出すること，人間の病気の原因を鉱物の病気との類比から知ることができること，金属生成の従事者が作業の過程で精神的に「熟成し」自己治癒力を体得すること，であったという。中でも，錬金術の従事者自身が体験する「精神的変容のプロセス」に大きな関心を抱いた。「錬金術文書の中にくりかえし現れる標語『解きて結べ』solve et coagula から推測されるように，錬金術師は自らの術の本質を，一方では分離と溶解に，他方では結合と凝固に見ている」（Jung，1955/1995）と推察した。

Jung（1955/1995）は，錬金術師に共通している理念が「持続（延命，不死，不朽），男女両性具有，霊性〔精神性〕と肉体性との共在，人間性ないしは人間類似性と神性との共在」であると指摘する。そして「このような対立問題に心の領域で明らかに類似しているのは，通常は不調和な素質に起因する相容れない諸傾向が，互いに衝突して惹き起こされる人格の分裂である」（Jung，1955/1995）と述べる。そしてこの対立を「『抑圧』するのは，葛藤の引き延ばしと拡大，神経症をもたらすだけ」であり，「心理療法は，対立するもの同士を対決させ，対立の持続的な一致を目ざす」ものであるとした。対立物の結合―調和―が，人間の向かう方向であり，それが心理療法の目ざすものでもあると Jung（1955/1995）は考えたのである。

### (9) 調和をもたらす「容器」

もう１つ，錬金術と心理療法の共通点として「容器」（Jung，1944/1976）の重要性がある。心理療法において，場所や時間といった「構造」（栗原，1992）は，その面接を支える要素として重視される。面接における構造を明確にすることは，面接の場が日常生活とは異なる空間・時間として，目には見えない一線で隔てられていることを意味する。時間と空間が構造化された面接の場という「容器」の中で，相互作用が行われるという点が，心理面接と他の会話場面とを分かつ重要な要素であると考えられる。Jung（1944/1976）は，石や溶剤を入れる溶解炉である「容れ物」について「それは道具にはちがいないが，『第一質料』および石に対して独特の関係を有しており，その意味で単なる道具なのではない」，「容器は，錬金術の中心概念がすべてそうであるように，むしろ神秘的な観念，正真正銘の象徴だからである」と説明する。つまり，容器は道具としての役割とともに，象徴として，存在するのである。象徴は，単なる代用物とは異なる，「比較的未知のことがらの可能な最良の表現」(李，1992)である。そのことを表すために他のものではとって代わることができないものを示す。容器は，子どもを孕む容器としての子宮でもあり，祭祀に用いられる神秘的な力を持つ器でもある。対象に力を与え，新たなものを生み出す容器としての役割を面接の場が持つことを Jung は見出したのである。

## 2. Ferdinand de Saussure の理論

Ferdinand de Saussure は，1857 年にジュネーブに生まれ，1913 年に没した。19 世紀後半のヨーロッパは，「列強は激烈な競争を相互に行いつつ，無数の条約とたえず相手を変える同盟の複雑な網の目で結合されていた」。普仏戦争にドイツが勝ち，東欧ではロシア帝国が脅威となるなど，政治的な不安定感がある一方で，「実証主義，科学主義，進化主義の影響が支配していた」（Ellenberger，1975/1980）。そのような中で，科学主義や合理主義への批判に基づく新たな見識が，様々な学問領域に現れた。精神医学の分野では 1895 年に Sigmund Freud の「ヒステリー研究」が刊行され，新たな力動精神医学が始まっていた。Saussure は，言語学において，それまでの言語命名論を覆し，言語によって世界が体系づけられることを示した。1891 年に，パリにおける言語学についての研究・教育活動の功をたたえられてフランス政府よりレジョン・ドヌール勲章を贈られた（丸山，1983）。その後，Saussure はジュネーブに戻り，晩年，郷里のジュネーブ大学でインドヨーロッパ語比較文法を講じるかたわら，一般言語学を講じた。それが「聞きすてるには余りに惜しい名講義だった」ため，後年，弟子たちが「一般言語学講義」として書にまとめた（Saussure，1915/1972）。Saussure の言語論は，人間がどのようにして世界を把握しているかについて貴重な示唆を与えている。この言語論は，現在も否定されるものではないと考える。本研究では，Saussure の言語観に基づいて，ことばおよび思考体系を捉えていくこととする。

### (1) ことばによって世界が切り分けられる

Ferdinand de Saussure（1915/1972）は，「思想は，それだけ取ってみると，星雲のようなものであって，そのなかでは必然的に区切られているものは一つもない。予定観念などというものはなく，言語が現れないうちは，何一つ分明なものはない」と述べて，物や概念が先にあってことばはその名前であるという言語名称目録観を否定した。そして，言語活動（*langage* ランガーシュ）を言語（*lange* ラング）と発話（*parole* パロール）に区別し，言語を聴覚イメージ（*signifiant* シニフィアン）と概念（*signifie* シニフィエ）の 2 つの要素から構成される記号（*sigune* シーニュ）と捉えた（Saussure，1910/2007）。言語活動（*langage*）とは，「人間のもつ普遍的な言語能力，抽象化能力，カテゴリー化能力およびその活動」を示し，言語（*lange*）とは「個々の言語共同体で用いられる多種多様な国語体」を示し，発話（*parole*）とは「特定の話し手によって発せられた具体的音声の連続」を示す（丸山，2008）。聴覚イメージ（*signifiant*　能記）と概念（*signifie*　所記）は不可分であり，「ある聴覚記号と，かたまりから切り出したある一片の組み合わせにより」価値が生まれる，と言う。「さまざまな概念が何か事前に存在するものを表象する」ことはなく，「音においても，事前にはっきり区別させた単位」は存在しない（Saussure ，1915/1972）。丸山（1983）は，「ソシュールがいっているのは，コトバと観念，表現と内容というものの

同時発生，不分離性であり，言語記号が生まれる以前に既存の純粋観念などというものはない」，「内容を存在せしめるのは表現」であり，「表現と同時に内容というものが生れる」と解説している。これについて，丸山（1983）は，子どもがことばを獲得していく過程を例に挙げる。電車に乗った子どもが「デンシャ」という習いたての単語について，母親に「デンシャって人間なの？　それともお人形なの？」と尋ねた。この子の頭の中には，人間か人形（人間でないもの）かという 2 つのカテゴリーがあり，世の中のものはそのカテゴリーに 2 分されて把握されるのである。「動くもの，そして柔らかく温かい感触をもつもの…人間」と「動かないもの，そして固く冷たい感触をもつもの…人形」という 2 つのカテゴリーで世界を捉えていたところに，「動きはするが，さわってみると冷たく固い感触をもつ」新しい指向対象が登場したことによって，その子は混乱し，母親に「デンシャ」は人間か人形かどちらに属するのかを尋ねたのである。この例が示すのは，人は知覚や感覚によって体験したものごとを，命名することによって「認識の網の目によって再編成」していくという過程なのである。赤という色を，朱，紅，茜，と命名していくことによって，色相のわずかな違いが意識され区別されていく。夏の暑さを夏日，真夏日と命名していくことによって，暑さの違いを温度や出現頻度という枠で認識しなおす。Saussure（1915/1972）が「言語が現れないうちは，何一つ分明なものはない」と述べるように，人間はことばによって 1 つひとつ世界を切り分け，自らの思考体系，世界観を作り上げていくのである。

### (2)　言語には差異しかない

そして，Saussure（1915/1972）は，「言語には差異しかない」と述べた。言語記号によって「星雲」のようなかたまりの世界から切り出されるのは，記号間の差異であり，実定的に与えられたものはない，というのである。たとえば「人間」というものを理解しようとするとき，もし道具を使うという定義を用いると，チンパンジーは人間なのか？　ことばを使うという定義を用いると，ことばで動くロボットは人間なのか？となる。そうすると「人間」というものは，チンパンジーでもなく，ロボットでもないもの，として表される。そのように，他のものではないという差異がことばの意味を決めているのである。「人間」という言語記号で世界を切り分けたときにもたらされるのは，人間と人間でないもの，という差異の対立構造なのである。これら，ことばの示すものが普遍的実体ではなく，差異であるということは，日常的に経験する。先述のように，“少年”ということばについて，児童福祉法で少年という場合，小学校就学から 18 歳未満を指し，性別は問わない。一方，少年雑誌という場合は，対語として少女雑誌があり，少年は成人に満たない男性を指す。このように，“少年”ということばが示すのは，“少年とはこれこれである”という実体ではなく，“成人ではない”“乳幼児ではない”，あるいは“少女ではない”などのような，“他の○○ではない”という差異を示すのみなのである。

### (3) 言語の不変性と可変性

言語記号を構成する，聴覚イメージ（*signifiant* 能記）と概念（*signifie* 所記）の結びつきは，自然なものではなく，「恣意的」である。けれども「言語は過去と連動しており，そのことが言語から自由を奪って」もいる（Saussure，1910/2007）。ことばはそれを語る集団があってはじめて言語として成り立つのである。ことばの成り立ちが恣意的なものであっても，たとえば昨日まで人間と呼んでいたものを今日から異なる呼び方をするわけにはいかない。それは「言語の中で時間的要因が連続している」（Saussure，1910/2007）ことによる不変性，不自由さであると言う。しかし，その時間的要因は，可変性という逆の形でも現れる。「ラングの中に一切の絶対的基準がないということは，時間の流れとともに実質面でおきるさまざまな偶発事が体系の中に組み込まれて，関係そのものを再布置化することを妨げるいかなる力ももたない」ために，変化が生じるのである（丸山，1983）。平安時代のあわれ（あはれ）やおかし（をかし）と，現代のあわれ（憐れ）やおかし（可笑しい）では表す概念が異なる。しかし，これらはある日変更することを強制されたのではなく，時間の流れの中で様々な偶発事が組み込まれることによって変化していったものである。

### (4) 価値の相対性

時間という軸の捉え方について，Saussure（1910/2007）は，価値を捉えるには同じ時間の中で捉えることが必要であると述べる。ことばの価値は，同じ時間に一定のルールの上で始めて成り立つというのである。たとえば，将棋の王将は，将棋の盤上では，いちばん高い価値を持つ。しかし，王将は，棋盤を離れると１つの木片に過ぎない。王将ということばが示す価値はごく相対的なものなのである。それらは紙幣や硬貨の場合にさらに顕著になる。日本で１万円と言うと，そこそこの食事ができる，ちょっと高価な本が買えるなど，一定の価値を示す。しかし１万円札を他の国に持って行った場合，両替をしない限り，１枚の紙片に過ぎず，何かの代価とすることはできない。ある国においては，１万円札も千円札も 100 ドル紙幣も“外国の紙幣”として同等の価値範疇に置かれるかもしれない。しかし，日常的に“１万円札”という場合，それは普遍的なものであり，１万円札という価値を持った実体を示すかのように捉えてしまうのである。

そのように，「語の価値とは，体系内の他の辞項との相互的位置と対立関係から生まれる差異」にすぎないと Saussure は考える（丸山，1983）。先述のあわれやおかしの例で言えば，そのことばが示す概念は時代を限定して捉えることで，意味が通用するのであり，また，そのことばを使用する集団内でのみ通じるものである。言語が言語たるためには「その言語を話す共同体が必要」である（Saussure，1910/2007）。そして，1 つの共同体は，そこに「記号的体系を構成している単位が，恣意的関係の世界においてはじめて成立するものであり，〈コト〉とは常に何かに対する〈コト〉であって，単独な個としての〈コト〉など存在しない」のであり，「一見，事物それ自身が有するかに見える客観的価値，有用性，

使用価値といったものも，実は一定の文化体系のなかだけで機能する交換価値，象徴価値と同じ本質をもつ関係的存在に過ぎない」のである（丸山，1983）。

Saussure は，ことばというものが指し示すのは，その実体ではなく他のものと区別する「差異」であり，そのことばが示す価値も絶対的なものではなく相対的なものである，という本質を指摘したのである。ことばが文脈の中で理解されるものであり，使われ方によって意味が異なるということは自明のことのようであるが，人は日常的にことばを使う中で，いつの間にか，ことばの指し示すものは 1 つの実体であるかのように錯覚してしまうのである。それは，1 つの共同体の中では，ことばの示す意味について細かな説明をしなくても通用するという経験を重ねることによって強化されていくと考えられる。日本の国から出たことがなければ，1 万円，5 千円というような 2 分の 1 を単位とした区切り方を自明のことと捉えるかもしれない。しかし，国によっては 4 分の 1 を単位として 25 セント硬貨を発行しているところもある。ものの区切り方は，決して一様なものではない。それらはその共同体の文脈や捉え方，ひいては世界観に由来する。そのように，もともと自明なものはなく，1 つひとつのことがらが，恣意によって作り出され，一般化され，約束事として存在するのである。しかし，それが一般化されればされるほど，恣意から出発した経緯が後退し，いつの間にか，ことばと実体は分かち難く対応しているかのような捉え方に陥ってしまう。そして遂には，ことばによって世界が切り分けられたという成り立ちが逆転し，実体が先に存在しており，その実体に名前がつけられていったかのように捉えてしまうのである。

一般化が進むことによって，あたかもそれが大前提であり，客観性を持ったものであるかのように扱われるということが世の中には多くある。Saussure は，それまでの言語学における大前提を覆した。Saussure の理論は，先述した“客観性とは何か”という問題提起を導く視点でもある。

### (5) 対立～調和「弁証法的運動」

言語は，社会的（*lange*）であると同時に個人的（*parole*）であり，恣意的であると同時に不自由さを持ち，不変的であると同時に可変的でもある。丸山（1983）は，Saussure の思想とは「体系自体が自己の内部に対立物を含み，これによって自己否定運動を起して乗り越える」といった「弁証法的運動」を包含するものであると説明する。

## 3. イメージについての理論（意識発達の起源としてのイメージ）

Jung（1928/1955）は，人間の精神生活の目標としての「自己」という観念について，「それ自体超越的な要請であって，心理学的には是認されても，科学的には証明することができない」ものであり，それは「われわれの頭の中にあるイメージというよりも，われわれ自身すらその中の一部であるようなイメージ」として捉えられる（Jung，1928/1955）と述べ，科学主義や合理主義では俎上にあげられなかったイメージに光を当てた。また，Saussure（1915/1972）は，「言語」の役割について「思想と音との仲を取り持つこと」と述べた。そして，言語は「茫漠たる観念の無限平面（A）と，音の・それにおとらず不定のそれ（B）との上に引かれた，一連の隣接下位区分」として表されると述べ，「その模様はこの図をもってよく彷彿させることができよう」と波の図を描いた。「図をもって彷彿とさせる」とはまさにイメージを描くことを意味する。そして「空気が水に接触するさまを思い浮かべられたい；気圧がかわると，水の表面は分解して一連の区分，すなわち波となる；この波動こそ，思想と音的資料との合一の・そしていわばつがいの観念をいだかせるのである」（Saussure，1915/1972）と説明している。ここにもイメージの介在が見てとれる。イメージとは，人間の精神発達にどのように関わってきたのであろうか。

### (1) 意識を発達させたイメージ

民族芸術について研究した木村重信（1971）は，人間の意識の発達において，そのはじめにあるのはイメージであるとして，イメージの機能を重視した。以下，木村（1971）の研究を概観する。木村は，ラスコー洞窟壁画やサハラ岩面画、ニアス島など，ヨーロッパ，アフリカ，インドネシア各地の，旧石器時代から中石器時代，新石器時代にかけての原始美術，および未開美術を調査し，「イメージの機能と意識の発達との関連」について明らかにすることを試みた。

### (2) 意識活動の第一歩—2 つの事象を関連付ける

木村（1971）によれば，ラスコーに代表される旧石器時代の洞窟壁画は「基本的には動物の身代わりをつくりだし，それに呪術的な効果を与えることを目的とした絵画であり，その意味でそれは文字通り現実の動物の分身」であった。分身である動物が矢をうけることは，現実の狩の成就を意味する。そこには「野獣を狩る危険と飢餓の緊迫によって強められた，彼らの強烈な欲望」が潜んでおり，「動物の描写であるとともに動物そのものであり，欲望の表現であるとともに，欲望の充足でもあった」。つまり，そこに描かれた動物は，狩という行為を対象化して描かれたものではなく，目の前の動物そのものであり，現実の

欲求や恐怖と結びついたものであった。描いた牛に槍が刺さることで現実の牛が死ぬという考えは，非合理的なものであるが，非合理なものであったとしても，「二つの事象の間に関連をつけること，それが人間の意識活動の第一歩であった」と木村は述べる。

### (3) 物語性の誕生

その後，時代の経過とともに動物像の形象は実物大から次第に小さくなり，それに伴って様式化されていった。中石器時代のものと考えられる，東スペインに位置するレバント岩壁画では，人間が多く描出され，「その人物が動物とさまざまな形で結合して，ひとつの場面の中にあらわされている」といった特徴がみられた。ひとつの場面の中に人間が登場することによって「物語的性格」を帯びた。描かれた場面が，ある時，ある場所での出来事なのである。旧石器時代の，いま目の前にあるものとは時間的空間的に異なる。しかも，動物像は写実的であるのに対して，人物像は影絵ふうにデフォルメされており，それは「作者の関心が，人物の姿態に対してではなく，その行為に注意がむけられて」いることを表していた。形象の単純化や様式化によって，それらは「動物や人間そのものよりも，むしろ狩猟，戦闘，舞踊などの物語表現と運動表現を一層きわだたせ」たのである。旧石器時代美術が，生活と密接に結びついた，現実そのものであったのに対し，中石器時代のレバント美術は，今そこにある現実とは「異なる空間概念」を顕していたと言う。人間が画の中に登場したことは，行為をする自己を「視る」自己という新たな視点を意味した。

### (4) 様式化—抽象化の萌芽

さらに新石器時代になると，2 匹の動物が人物をはさんで左右対称に配置された石版が見られた。これらの構図を意識するという行為は，記憶を自動的に投影した旧石器時代の壁画と明らかに異なった。実在の空間とは別の，「新しい観念空間の意識がうまれたことを意味」した。人間の意図や意思がそこにこめられているのである。加えて，新石器時代の美術は「現実空間とは異なる抽象的な空間の枠の中に現実のイメージを集め，変形し，単一に還元して形象をつくり」だしていた。たとえば，女性像が豊饒をあらわし，円は太陽をあらわした。それらは客観的な現象ではなく，その形態は「特殊な観念や感情の象徴」となった。

### (5) 観念の誕生

象徴化や抽象化によって，人間の意識には，様々な観念が生じた。精霊や霊魂など超自然的なものに対する信仰であるアニミズムもその 1 つであった。現実に在るものに霊的な力を付与することによって，現象の世界と霊的な世界を関連づけ，意味づけた。このように「イメージから観念が抽象されたという意味において，観念こそ形象のシンボル」なのである。そして「象徴による形象化の能力の発達は，やがて知的な面における論理の発達をも促し，文字の発生へと」つながった。中石器時代以降数千年の幅を持つ，サハラ美術

では，後期の岩面画に，砂時計形人物や釣鐘形人物など様式化された人物が描かれ，さらに末期には，格子図形やジグザグ線などの抽象図形が見られた。それらは「象徴的な姿を思いうかべることによってのみ視覚的に表現されるものであり，一種の符牒」と考えられた。それらが文字の原型となっていったのである。

### (6) はじめにイメージありき

以上のような経過から，木村（1971）は，人間におけるイメージの機能と意識の発達の関連について，次のように捉えた。現実的な対象からイメージが生じ，イメージによって，異なる 2 つの事象の関連づけがなされた。事象の関連づけという意識活動は，人間自身も対象化する視点を持つことへと発展し，物語的捉え方や，目の前の現実とは異なる空間概念をもつことにつながった。人物と動物を 1 つの画面の中に描くことは，観念という抽象的な捉え方を生んだ。そして，現実の対象に対して，現実的機能を認めたまま，観念的な性格を与えることによって，現実空間と観念空間を結びつけた。そこから，現実の表象が特定の観念や感情の象徴となる，という象徴化，抽象化の能力が発展した。象徴によってイメージを形象化するという能力の発達が，論理的思考を促し，文字の発生を生んだ。木村は「精神の領域を拡大していく」ことは，「イメージの働きによって拡げられ，鋭くされ，生命づけられるのであり，従ってイメージの働きこそが文化一般の先行条件なのである」とした。

### (7) ヨーロッパにおけるイメージの発達

ヨーロッパでは，20 世紀に入り，その前の時代の合理主義や科学主義偏重への警鐘として，再び神話やイメージに目が向ける動きがあった。ルーマニア出身の宗教学者である Mircea Eliade は，人間の精神生活におけるイメージの機能について，相反する意味をも包含する「多価性」と，歴史を超えた「永続性」を強調した。Eliade（1952/1971）は，イメージと心理学の関連にも触れ，「いわゆる《無意識》は，意識的生活よりもいちだんと《詩的》なのである」と述べる。ここでいう《詩的》とは，イメージやシンボリズムなど，非理性的，非具象などと言われるものを指す。そして，白昼夢や夢の中に神話的なものが見出されることを例にあげ，無意識は「より《哲学的》，より《神話的》である」と続ける。しかし，「イメージを具体的な事項に《置き換える》ことは意味のない操作」であり，「イメージが意味づけようとしているものの実体は，《具体》へのかかる関係づけによって尽くされるものではない」と強調する。Eliade は，そのような観点から「『心理学そのものを語りながら』，フロイトの精神分析を乗り越え，イメージの精神的意味作用を再び打ち出したことが C. G. ユンクのもっとも大きな功績である」と記している。

### (8) イメージの性質—両価性

Eliade（1952/1971）は，イメージが「多価的」な構造を持つことによって，「反対の一

致」というような，「概念によって表現されえない」ものを可能にすることを挙げた。 さらに，イマジネーションが「『イマーゴ』(imago)《表象，模倣》と，『イミトール』(imitor)《模倣すること，再生産すること》との合成語である」ことから，イマジネーションとは，「イメージに『倣い』，それらを再生産し，再び実在的なものとし，果てしなくそれらを繰り返させる」ことであり，イマジネーションをもつことは，「世界をその全体性のうちにみることである」と説明した。そして，「イメージの力と使命は概念にどうしても従おうとしないすべてのものを『指し示す』ことだから」と続ける。つまり，概念的，論理的には，包含できないものを組み入れ，位置づけることがイメージの機能によって為されるというのである。たとえば，「結び目」が紐や網という形をとってインド・ヨーロッパ神話の神々の武器として用いられ，「結び目」は《縛める神》自身をも表す。同時に，《縛り》は「魔除け」の意味も持ち，「病をもたらすが，同時にそれを追っ払い，治癒させもする」。1 つのシンボリズムが「『肯定的』にもなれば，『否定的』にもなる」という両価性を携えるのである。

### (9) イメージの性質—永遠性と可変性

Eliade（1952/1971）は，「中心」「結び目」「貝殻」などの象徴作用，すなわちシンボリズムの研究から，イメージが歴史や文化の違いを超えた「永遠性」を持ち，イメージとシンボルが現存することによって，特定の様式や時代背景を持つ文化を，誰にでも近づきやすい，「《開かれたまま》にしておく」ことが可能であるとした。「鋤（スペード）が男根と名づけられ（いくつかのオーストラリアや，アジアの言語の中にときとしてあるように），種まきが性行為と同視される（世界中どこでもそうであったように）としても，だからといって，《原初》の農民たちがその労働の特殊な機能と，その道具の具体的，直接的価値を知っていないとはいえないだろう」と説明する。象徴作用は，その対象となる道具や行為の「独自な直接的価値をなんら侵害することなく，対象なり行為なりに新しい価値をつけ『加える』」ことを可能にする。

### (10) 多義性と超越性

以上のように，イメージは，多価性や多義性および時間と空間の超越性を対象に付与する機能を持つと考えられる。Eliade（1952/1971）は，イメージや象徴作用について，「多価的」な構造を持ち，論理すなわち合理的思考では許容できないものも包含し，さらには，新たな価値や意味も付加できるという機能を持つ，と捉えた。この「直接的価値」を損なうことなく「新たな価値付与を可能にする」(Eliade，1952/1971）という点は，木村（1971）の「現実的機能を認めたまま，観念的な性格を与えることによって，現実空間と観念空間を結びつけた」という指摘と重なる。現実の具体的道具や行為として成立しながら，同時に象徴的な意味も持つことができるという特性こそがイメージの独自性であると考える。イメージは，単に多義性を付与するのみならず，具体的な事物という時間的にも空間的に

も閉じられた一点ににとどまりながら，時間や空間の域を超えることも可能にする能力を，その対象に付与するのである。現実の具体的役割を損なわないがゆえに，永続的なものになり得るという逆説を，イメージは含んでいるのである。

# 第 III 章　先行研究

「ことば」と「非言語表現」について，臨床心理学実践の立場から論じた文献を参照する。

## 4. 臨床心理面接におけることば

### (1) 詩的言語

河合（1991）は，心理療法における言語について，日常言語，詩的言語，科学言語という観点から論じた。ここで示された「詩的言語」は，先述の Eliade（1952/1971）が無意識について説明する中で，イメージや神話と並列させた「《詩的》」に通じるものとして捉えることができる。河合（1991）は「言語というものは，まったく自我の支配するものとは限らず，多分に無意識的な面をもつということになるだろう。自我が確実に把握している内容を言語という手段によって他に伝えるだけではなく，言語が生じることによって，自我がその内容を知る，あるいは，内容を明確にする，ということもあるわけである」と述べた。そして，自我の把握し得ないものを示す言語を「詩的言語」と捉えたのである。日常的な言語では，「石」といえば自明のものと判断する。それをわかりきったものとするのではなく，それを「明視」し，わかりきったという状態から「石」そのものを引き出すことによって見出された言語が詩的言語である。そして「詩的言語の回復と，クライエントの回復が一致して生じ」，心理療法家の役割は「クライエントがそのような回復の過程をすすむための容器（コンテナー）として存在すること」と述べる。

### (2) 科学的言語

一方，科学的言語は，「言語を用いる人間がその内容を明確に対象化し，自から切断された他として把える」ことを必要とし，「誰にとっても同じ内容を指し示す」普遍性をもつものを指す（河合，1991）。人間の「道具」として言語の機能を考える場合に，科学的言語は非常に有効である。しかし「科学言語が自と他を切断する」ことに立脚しているために，「自分と世界はどのように関係するのか，このような主観的な問に，科学的言語は答えない」と河合は指摘する。

### (3) 深層心理学におけることば

河合（1991）は，深層心理学を科学たらしめるために精神分析が科学的言語を用いつつも，中心概念にエディプス・コンプレックスという神話の名を据えたことが示唆深いと述べる。そして心理療法家の役割は，「彼が詩的言語を語るのではなく，まずクライエントに詩的言語を語る場を与え，それを理解すること」であり，クライエント自身が意識していない日常言語と詩的言語の区別を「明確に意識し言語化する」ことであると続ける。そして，その「言語化する態度に『科学的』要素が入ってくる」のである。セラピストとクライエントが「内的経験を共有」するとき，「一種の普遍性が存在」する。それが理論的枠組みの中に組みこまれるとき「ある程度の科学性」をもった深層心理学の用語となる，と述べる。それゆえ，深層心理学における言語は，「日常語とも詩的言語とも科学的言語とも異

なる，第四のカテゴリーに属する」と考えてもいいし，「科学的言語が拡張されたものと考えることもできるであろう」と論じている（河合，1991）。河合のいう「日常言語」「科学的言語」を Saussure（1915/1972）の定義に当てはめると，その共同体における社会的産物としての「言語 *langue*」（Saussure，1915/1972）に分類されると考える。そして「言語 *langue*」が「詩的言語」のイメージ性を備えることによって，「第四のカテゴリー」としてのことばが誕生すると考える。

### (4) イメージとことばの関係

岡（2003）は，「心理療法におけるイメージとことばの関係は複雑であり，明瞭には説明しがたい」ものであるとし，「イメージ喚起力のない言葉は無力であり，まったく言葉にならないイメージはしばしば不安を喚起する」と述べる。そして，対話によってクライエントの「イメージと言葉の深層・深淵を覗き込んだような体験」をすることによって，「セラピストはクライエントの生命力と精神力を実感し，相手に敬意を自然に抱く」ことが生じ，「このような関係がクライエントの人間的生活を援助する可能性があるという発想が，心理療法の発想であるといえよう」と述べる。そして「イメージと言葉を生かす心は詩人の心」であり，セラピストが「時に詩人の心を併せ持つことが必要」と言う（岡，2003）。先述した河合の「詩的言語」（河合，1991）を見出す心理療法家の態度と重なるものであると考えられる。

### (5) 新たなことばを見出していく場＝心理面接

クライエントが自身の体験をことばによってセラピストに伝え，セラピストが面接構造という枠の中でクライエントを支える「容器」となり，クライエントが自分の体験を「明視」することによって，新たな発見をする過程が心理面接と言えよう。ことばが，Saussure（1915/1972）の言う「社会的所産」としてだけでなく，個人の内界の表現も可能にするものとなったとき，心理療法が展開しているといえるのである。河合（1991）の言う，日常言語でも詩的言語でも科学言語でもない「第四のカテゴリー」を見出すことは，クライエントが内面の世界と外界の調和を保ちつつ現実生活を送ることにつながると考える。そうであるとすると，「第四のカテゴリー」とは，日常言語でもあり詩的言語でもあり科学言語でもある「ことば」とも言えるのではないだろうか。そして，そういったことばを，面接という容器の中で，クライエントと共に見出していくことが心理面接であると考える。

### (6) ことばの背後にあるイメージの群れ

個人の体験がイメージの力を借りて言語とともに表され，セラピストに伝わるとき，心理療法が展開すると考えられる。山（2006）は，面接事例を言葉にすることの意味について考察した。クライエントが面接で直接心理療法家とは関係ないように見えることがらを話した場合にも，「心理療法家に伝えたい内容として，クライエントに選ばれ，語られたと

いうことを考えるならば，やはり関係性のなかで現れて来たものである」ことに注目する。そして「クライエントの話すことの背後には，中心になるイメージがあり，それと結びついたイメージの群れが存在するのである。われわれはその内側に入り，内側からそのつながりを見ていく必要があるのではないか」（山，2006）と述べる。

### (7) 自己を囲む世界を構成することば

岡村（2009）は，統合失調者との個人心理療法過程を通して，クライエントが繰り返し語る言葉の意味を考察した。岡村は，イメージなどの象徴的表現は「自己を囲む世界が存在して始めて成立するものであり，『自分が自分である』という感覚自体をもつことが難しい統合失調者は，その世界を成立させる作業から始めなければならない」と述べる。そして，面接で単調な訴えが繰り返されることについて，「相互の関係を失ったモチーフの断片が，心理療法という器のなかからゆっくりと新しい変化が生まれ，多義的なイメージや現実を取り込みながら，少しずつ全体のまとまりを獲得していく」過程であると捉える。イメージという象徴表現に至るには，自己を囲む世界の確立が前提となり，それを可能にするには「果てしなく繰り返される単調さにセラピストが破壊されずに生き残り，その世界の生成を待つといった構造（容器）をしっかりと有しておく」（岡村，2009）ことが必要であると述べる。

### (8) 語用論からのアプローチ　一般意味論

心理面接におけることばの重要性について，ことばの用い方の点からその特性を捉えた研究がある。Alfled Korzibski（1879-1950）を創設者とする「一般意味論 General Semantics」である。一般意味論は，「応用言語学の一部門であり，ことばとそれを使用する人間との関係を考えようとする『語用論』に属するもの」である（井上・福沢，1996）。Korzibski 直接の高弟である Hayakawa（1972/1985）は，「言語と，人々の言語的習慣が，人が考える時（考えの十のうち九までは自分に話しているのである），話す時，聞く時，読む時，書く時に，どう使われるかを調べ」，「言語と思考と行動の間の関係」について著した。その中で，「人類が任意に，あるものを他のものの代わりにし得るという過程を，記号過程（symbolic process）」とし，「記号表示のあらゆる形式の中で，言語はもっとも高度に発達し，もっとも精巧で，もっとも複雑である」と述べる（Hayakawa，1972/1985）。そのため，人間は記号と物を混同してしまう。その例として，富裕の記号として借金をしてでも新型車を買ったり，かつては日に焼けた皮膚が労働者の目印であったのが，時代が変わればレジャー生活を示す印となることなどを挙げた。そして，「その記号を律する第一の原則」として，「記号は物そのものではない。The symbol is *not* the thing symbolized. コトバは物ではない。The word is *not* the thing. 地図は現地そのものではない。The map is *not* the territory it stands for.」ということを強調した。

また，「コトバを通してわれわれに達する世界を，自身の経験で知り得る世界と対比して

言語的世界（verbal world）と呼び，後者を外在的世界（extensional world)」として，両者を区別した（Hayakawa，1972/1985)。言語的世界と外在的世界は密接に対応しているが，それだけに，その両者を区別して捉えることに注意深くあらねばならない。記号と実体を混同することは，実体のない不安や恐怖に苛まれることにもつながるであろう。

### (9) 一般意味論の心理面接への応用

福沢（1996）は，一般意味論の心理学との関連について「一般意味論は，シンボルや記号に対する人間の行動や心理の分析を考えていて，これらの定義は，そのまま，シンボルや記号に関する心理学の定義に移行できる」と述べる。福沢（1996）は，ことばに含まれる個人的な感情の雰囲気である「感化的内包」の違いによって，指し示すものは同じでも，情緒的な内容が異なることを指摘した。例えば「ぼくのおとうさん」と「ぼくのパパ」は同じものを指してしても，情緒的内容は異なってくる。そういった感化的内包は，「蔑視感や卑猥感を刺激するようなマイナスの方向をもつとき」，「偏見」や「タブー語をつくりだす」（福沢，1996)。このように，一般意味論が思考過程やコミュニケーションの過程に関係していることは，一方で「治療的側面」ともなるという。具体的には，ことばの「抽象の段階を明確にする」という手続きとなる。例えば，「この子はわがままだ」というクライエントのことばについて「年上の子と遊んでいる時はどんな遊びをしていますか」や「ともだちは何人いますか」のような事実を押さえる質問をすることで，「『わがまま』というような抽象の段階が高くて短いコトバでは表しきれない面があることに気づかせ，『この子』についての再検討をさせる」ことにつながる，というのである。一般意味論を基本としたカウンセリングや心理療法の「基本的手続き」では，「具体的な姿を明らかにすることは，クライエントがもっている状況の認識状態にゆさぶりをかけること」になると捉え，それによって「考え方や認識の仕方を再検討」し，「適応の仕方をみつけ」ることにつなげていくのである（福沢，1996)。

### (10) ことばと現地の関係

一般意味論（Hayakawa，1972/1985；福沢，1996）と，「詩的言語」（河合，1991）や「詩人の心」（岡，2003）の関係は，以下のように，捉えることができるのではないだろうか。

１つのことばが発せられたとき，そのことばについて，「抽象の階段を下り，事実にあたる」（福沢，1995）ことで，起きた出来事に近づくことができる。しかし，それは地面（現地）ではなく，「社会的所産」（Saussure，1915/1972)）としてのことばという土台に築かれた家の床板である。地面（現地）はさらにその下にあり，それは，家の外にある世界，つまりことばにされない個人の固有の体験世界ともつながっている。その，個人の体験世界に触れることによって「詩的言語」（河合，1991）や「詩人の心」（岡，2003）が加わり，より個人の体験した地面（現地）に近づくことができるのである。

そして，個人の固有の体験世界に触れるために，ことばだけではなく，非言語表現という媒体が必要となるのである。

## 5. 臨床心理面接における非言語表現

### (1) 臨床心理面接における非言語表現の起源

現在，描画をはじめとする絵画療法や，描画のみならず音楽やダンスなどを含む芸術療法，表現療法は，臨床心理面接において重要な技法の１つとなっている。描画と精神医療との関わりの始まりは 19 世紀末頃とされる。「精神病状態の最中にあり，現実との接触の喪失に圧倒された病者の中に，内面の混乱に対処するかのように，自発的に絵画を描く人たち」がおり，それらが「当時の一部の精神科医を魅了」し，創造に向かう衝動と内面の混乱との関係が注目された（石川，1983）。Jaspers（1913/1971）は，精神病患者の絵画や手芸品などを特徴ごとに分類した。それらの中に「本当に精神的なものの表現で，この作品を通してそれが了解できる」ものがあると記し，描画などの作品を手がかりとして作者である患者の「世界観」や「中心思想」を感じとることに言及している。しかし，それらは患者の描いたものから，その病態をとらえようという方向であり，描画や作品制作自体が治療に有意味であるという捉え方ではなかった。一方 Jung は，1913 年から 1919 年にかけての「創造の病」（Ellenberger，1970/1980）の際に，自分の内面から出る激しいイメージの群れと戦う中で夢を記し，描いた。そして「情動の背後に存在するイメージを見出す」ことが治療に役立つことを発見した（Jung，1963/1972）。Jung は，描画が無意識に接近するためだけでなく，それらを統御することにも有用であることを身をもって体験した。とらわれている観念を描画することによって，そこにまつわる不安を軽減しコントロール可能にするというのである。これは，描画行為そのものが治癒力を持つという現在の絵画療法や芸術療法につながるものと考えられる。

以上のような 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての描画への着目の時代を経て，さらに年代が進み，描画を心理療法の技法の１つとして用いたのが，精神分析家 Margaret Naumburg（1966/1995）である。Naumburg は，Scribble（なぐりがき）法を創案した。手順は，クライエントに対して，用紙にパステルやポスターカラーの絵筆を用いて「意識的に計画など一切たてることなく，流れるような一続きの線を即効的に」描くように言い，次に，それを眺めてから「構図や模様でもいいが，できれば対象，人物や動物あるいは風景を暗示していることに気がつかないか」と訊く。次に，暗示されたイメージをはっきりさせたり修正するよう加筆するように言う。こうして，描き手が，線の暗示するままにイメージを展開させるという技法である。Naumburg は，Scribble 法の目的は，描画テストのような診断ではなく，自発的なイメージの触発であると述べる（Naumburg, 1966/1995）。一方，対象関係論から独自の理論を発展させた精神分析医の Winnicott（1964/1998）は，スクイグル・ゲーム（Squiggle game）を考案した。これは，子どもの診察の際，子どもを飽きさせないための遊びとして行ったものであり，なぐりがきをクライエントとセラピス

トが交代で行う。交互 Squiggle（なぐりがき）法として，心理療法の 1 技法に加えられ幅広く用いられていった。

日本における絵画療法や表現療法は，これらの流れを汲んで発展し，風景構成法（中井），交互なぐりがき物語統合法（山中）など，独自の展開を重ねている。

### (2) 非言語表現の有益性

中井（1985）は，描画に代表される非言語表現について「もっとも理解されやすい有益性は，それが『関与しながらの観察(H. S. Sullivan)』をもっとも近づきやすい形にすることであろう」（中井，1985）と述べる。そして，「何かを語るのではなく『示す』ものである」とし，「正否はなく，“了解可能性”の限界もなく」「巧拙もない」ことを特徴として挙げる。描き手によって示されたものは，いわゆる社会的な価値基準のふるいにかけられることなく，受け手に届けられることが可能なのである。山中（1998）は，Winnicott の交互スクイグルに枠づけ法と物語作成を加え，「交互ぐるぐる描き・物語統合（MSSM）法」を考案した。その実践について「日常空間において苦痛や症状や病的な強迫などにがんじがらめになって，ほとんど遊び空間を失っているクライエントに，『ゆとり』をとりもどすことこそが意図されているのであり，解釈はほとんど意図していない」と述べる。そして「その全体変化系列を通覧すると，おのずから，その治療空間に流れていたイメージの流れをつかむことが可能となることも往々にしてある」（山中，1998）とし，描画によって表現されるイメージと，その流れをつかむことが重要であることを強調している。また，「『言語的に接近困難を抱えている事例』など，精神病そのものよりも，二次的な『関係性障害』を呈している事例」では「絵画療法はそれ自体で効果がある治療法」（山中，2003a）と言い得るのではないかと述べる。

### (3) 非言語表現に関する先行研究

描画を含む非言語的接近法についての先行研究は，対象に関するもの(中井，1973；岩井，1981)，技法に関するもの(中井，1974；山中，1998；徳田，1998)，その他実施形態に関するものなど幅広い。

中井（1973）は，統合失調症について，臨床段階区分より細かい 10 段階の「描画的段階区分」を提示し，各描画技法の適応時期について述べた。空間分割法や分割彩色法といった自由度の少ないものほど安全性が高い。臨界期以前の段階で描画を用いることについては「治療的意義をもたず，第一段階（発病前期）において描画を促すことは破壊的であり，急性期発来の引金をひくことがある」と注意を喚起する。自発的な描画は，臨界期初期である第三段階以降において安全かつ治療的であり，促された描画は，第五段階からが安全で治療的であると述べる。しかし，自発的描画であっても，「あまりに荒れた，病者が統合困難な展開を示すならば治療者は中止を指示すべきである。この場合適当な課題画が比較的安全かつ治療的である」（中井，1973）と付け加える。描画の自由度については，臨床場

面で的確に判断することが必要となる。また，枠づけ法（中井，1974）について，「枠は表出を保護すると同時に強いるという二重性があるようである」と，その意義を述べた。中井は患者の話から「枠づけは描画を容易にするが，いわば集中を強い，逃げ場がなく，描かないわけにいかない感じをおこさせる」，「これに反して枠がないととりとめもなくどこまでも無限にひろがっている感じで（略）何をかいてよいかわからず，まとまりにくい」という感じを与えることを記している。

徳田（1998）は，絵画療法を集団で実施する際の具体的な要点について述べた。その中でスタッフの姿勢として「観察するようなものでなく，時間内は少なくとも，共に描く姿勢であることが望ましい」とする。絵画療法の危険性としては「『見えるもの』として，そこに示されるものの情報量の多さに，ややもすればクライエントも治療者も取り込まれてしまう」ことを挙げた。ことばでは多くを表現しないクライエントが描画には非常に豊かな，時には激しい内容を表現することがある。セラピストもそれに圧倒されてしまうと，描画に入り込んでしまう。徳田（1998）は，「その危険性を認識しながら，可能な限り自然な形で，治療の流れの中に加え入れていくことのできるようもっていきたいものである」と述べる。

#### (4) 非言語表現の働き—象徴性による葛藤の超越

石川（2003）は，絵画や小説，俳句などさまざまな芸術表現を行ったクライエントとの事例を通して，芸術表現の意味について論じた。石川は，Jung の述べる「象徴には相反するもの同士の対立を葛藤を超えて結びつける働きがある」という理論に基づいて考察を行い，クライエントの作品は，内的対立が解消されたときに「『プロセス』として意味をなし，そこで得たものは自身に収斂されてゆく」と述べる。「作品の象徴性は，『症状』への解決を提示するというより，葛藤を超えることによる安定感をクライエントに直接感じさせるものであり，これが芸術療法の意義」であると言う。そして「イメージを運ぶ象徴＝作品は目に見える形で存在する」が，「形＝作品を通して再び目に見えないものに帰ってゆくことが，心理療法の本質」（石川，2003）であるとしている。

#### (5) 非言語表現の働き—言語表現への橋渡し

寺沢（2006）は，面接場面で絵画を用いた事例をもとに，絵画表現の「非言語的表現と言語的表出の橋渡し機能」について論じた。寺沢は，絵画表現においては「未だ言葉にならないものをも含みつつ表現することによって，言葉にしていける部分が生成してくる。言葉にならないことに他の表現が提供されるとき，言葉の表現へと向かう橋が見えてくる」と言う。そうして橋がかかるが，それは「非言語的表現に内在する豊富なイメージのなかから言葉になる一方，言語的表現をすることで非言語領域のイメージが膨らみすぎないよう歯止めをかける」（寺沢，2006）という重要な機能もあると述べる。

### (6) 非言語表現の働き—「窓 channel」を見つける

ここで，寺沢（2006）の述べる「言葉にならないことに他の表現が提供されるとき，言葉の表現へと向かう橋が見えてくる」ということについて考えてみたい。この「言葉にならないこと」を「言葉の表現へと」向かわせるためには，クライエントの抱える「言葉にならないこと」について，セラピストが何がしかの触手を持つことが必要となろう。それは，山中（2003b）の言う「窓」の，セラピスト側の部分にあたるものではないだろうか。山中はクライエントが「関心を向けているものを『窓』と呼び」，「その英訳として window ではなく，channel を充てた」（山中，2003b）。この「窓」を見つけるためには，セラピストが自分の有することばの枠組みに気づき，クライエントがことばで表し得ない体験世界と交信するチャンネルに周波数を合わせることが必要になる。その過程なくしては，クライエントの体験世界に触れることはできないであろう。周波数の合わないチャンネルを通して見る世界は，実のところセラピストの枠組みで構成されており，クライエントの体験する世界とは異なる。

この，クライエントの「窓」を見つけ，周波数を合わせる過程が，心理療法であると考える。周波数を合わせ，固有の体験世界を「垣間見る」（岡，2003）ことを経て，あらたな共有の場を構築することによって，クライエントの体験世界が拡充され，外界と調和することにつながるのであろう。

### (7) 非言語表現についての実証研究

非言語表現が「正否はなく，“了解可能性”の限界もなく」「巧拙もない」（中井，1985）という特徴を有していることから，その有効性や客観性を示すことは容易ではない。佐渡（2010）は，1960 年代以降のバウムテストに関する邦文献を精査し，統計的分析手法による先行研究についていくつかの問題提起をしている。問題として挙げたのは「指標の基準やその理論的根拠が不明瞭であること，研究者らが数量化の質の確保を怠っていること，臨床場面では個別法が採用されやすいにもかかわらず集団法による調査が多いこと」，および，多数の指標を群間で検定する際に生じる「意味が無い指標も有意差として解釈する危険性がある」（佐渡，2010）などである。これらは，研究の方法論の問題であり，研究手順や設定の不備に因るものであるが，描画という主題がもともと備える多義性や曖昧さに因る面もあるのではないかと考える。そのような実証性の難しさを背景とした中で，描画についての実証研究が重ねられている。

#### ① スクイグル線と内容の関連

山﨑（2008）は，スクィグル・ゲームにおけるなぐり描き線について，同一の描線を多数の被験者に提示し，その後に描かれた内容との関連の有無を調査した。それにより，「描線そのものが，その後に描かれる『内容』を規定する可能性が示唆された」としている。しかし，描線から喚起された「動き」という体験が，「変化を伴う動き」と「状態を維持し

たり，変化を拒んだりする動き」という「正反対の動きをともに喚起する可能性を有している」ことも実証的に示された，としている。また，実際の面接場面でクライエントとセラピストの描いた内容が一致した描線について，調査ではそれを裏付ける結果が出なかったものもあり，「面接という場がもたらす影響の存在」も示唆している。

### ② 風景構成法における関与状況と着目点の関連

浅田（2008）は，風景構成法による1枚の描画について，被験者が3段階の異なる状況で関与することで，その際の着目点が変化するか（しないか）について調査を行った。3つの段階とは，第一印象の段階・風景構成法を体験後の段階・提示された描画を模写したあとの段階、の3つである。それにより，「第一印象の段階では，動きを理由にした着目と，人への着目」が多く，体験段階では「形，大きさを理由にした着目と，近景群への着目」が増加し，模写段階では「中景群への着目は第一印象段階に比べて減少し，それまでにほとんど見られなかった地面への着目が現れた」という結果が得られたとしている。しかし，一方で，関与の仕方に変化のない被験者もあったとのことである。そして，描画を受け取る側，つまり「関与者側の生身の主体性」が「重要なファクターとして，無意識的に機能していることを意味する」と考察している。結果についての客観性については議論の余地があるかもしれないが，描画という主題に対する関与者側の主体性は重要な視点であると考える。

### ③ スクイグル・ゲームにおける被験者-面接者の関係性と描画の関連

また，里見（2011）は，複数の被験者とスクィグル・ゲームを行い，その際の被験者と面接者の関係性について調査した。スクィグル・ゲームによる描画について，被験者が同質性を評定し，さらに面接者との関係性を円で示すサークルテストの記入を行うという方法であった。結果は，被験者と面接者のそれぞれの描画の色彩やタッチは「同質ではない」と評定され，関係性については，「面接者のなぐり描き線を同質でないと判定した被験者は自身を表す円を大きく描く傾向」，「面接者の描画の内容や動きを同質でないと判定した被験者は自身を表す円を遠くに描く傾向」がみられたとのことである。これらから「描画の色彩やタッチ」は「相互作用の影響を受けにくく」，「個々の自己像」については両者の関係性のあり方によって影響を受けるという「相互作用が見られる」と考察している。

以上の3つの研究は，スクィグル・ゲームという二者関与の産物における，変化する部分と変化しない部分，あるいは主体性の保たれる部分と相互作用のある部分，が存在することを示したものと考えられる。しかし，いずれも調査手続きを慎重に行い，得られた結果に量的検討を加えたものであるが，それでもなお調査で実証することの難しい要因の存在を示唆している。

④　描画の読み取りにおける専門家と非専門家の違い

一方，橋本（2007）は，「描画の専門家は，描画者の共感性のどういった側面を読み取ることができるのか」について調査研究を行った。質問紙結果に表れた内容を描画からどの程度読み取ることができるのかという点でも興味深い研究である。方法は，被験者に動的家族画と動的学校画と共感性質問紙調査を行い，質問紙調査において肯定感情および否定感情の共有・共有不全尺度得点の高群と低群に分類し，その被験者の動的家族画と動的学校画を描画の専門家と非専門家が読み取るというものである。結果から，非専門家は，描画から描画者の共感性を読み取ることが困難であり，専門家は，否定感情共有の側面の共感性を読み取ることが示唆された，とのことである。そして，「共有不全」については，専門家においても読み取ることができなかった。橋本は「共有不全という『共有できなかったことを自覚する』という共感性の側面を，描画において捉えることの難しさ」に触れている。確かに共有できない，という「～ではない」ということを「～である」を示す描画から読み取ることは非常に困難なことであると考えられる。さらに，共有不全ということの背景に，多くの人がそう感じることと異なる感じ方を有している，ということが想像される。もしそうであれば，描画の専門家と言えども，多くの人に見られる一般的な傾向に基づいて読み取るのであるから，被験者についての情報がない中で，その被験者の独特の感じ方を描画から読み取ることは不可能に近いと言える。それらの困難はあるとして，描き手が表現したものが，どれだけ受け手に届くか，あるいはどれだけ受け手が読み取れるかという課題は，特に臨床面接場面においては重要であると考える。

(8)　実証的研究の限界

非言語表現について量的データによる実証的アプローチを行った先行研究を概観した。量的検討から得られた知見は，面接実践にも示唆を与える貴重なものであると考える。しかし，面接場面においてセラピストが感じとるべき感覚は，量的検討によって得られた「一般的傾向」とは異なる，そのクライエント固有の感覚であると考える。対象が「一般」と離れたものであった場合，実証的アプローチによって，一般との「差異」の程度を捉えることは可能である。一般とどの程度の隔たりがあるか，どの部分が隔たっているかという，隔たりの大きさや量である。また，一般と対象との関係性が示唆されることもあるだろう。一方で，クライエント固有の感覚を，それであるとデータで同定することは難しい。どのように異なるのか，という質の中身は捉えられないのである。それが「一般」と離れたものであればあるほど，質の内容を知ることや想像することは困難となる。一般との「差異」ではなく，固有の感覚を同定し表すことの難しさに，量的データの検討による実証研究の限界があると考える。

以上の先行研究に基づき，本研究では，量的データに現れにくいクライエントの固有の感覚に注目していくこととする。事例研究を通して，固有の感覚に基づく体験世界の存在

に気づき，それが非言語表現によって具現化され，ことばにも影響を与え，非言語によって示される固有の体験世界とことばで示される一般的世界が調和に至る過程を，見出すことを目指すものである。

# 第 Ⅳ 章　目　的

### (1) 調和に至る過程

本研究は，心理面接において，クライエントの固有の世界と一般的世界が調和に至る過程を見出そうとするものである。その媒体として，ことばと非言語表現を用いる。過程として以下を想定する。

① クライエント固有の体験世界にセラピストが気づく。
② クライエント固有の体験世界が非言語表現を通してセラピストに表現される。
③ クライエント固有の体験世界を表現することばを創出する。
④ クライエントが固有の体験世界を保持しながら，他者と共有される一般的世界と関わる。

### (2) 研究の方法

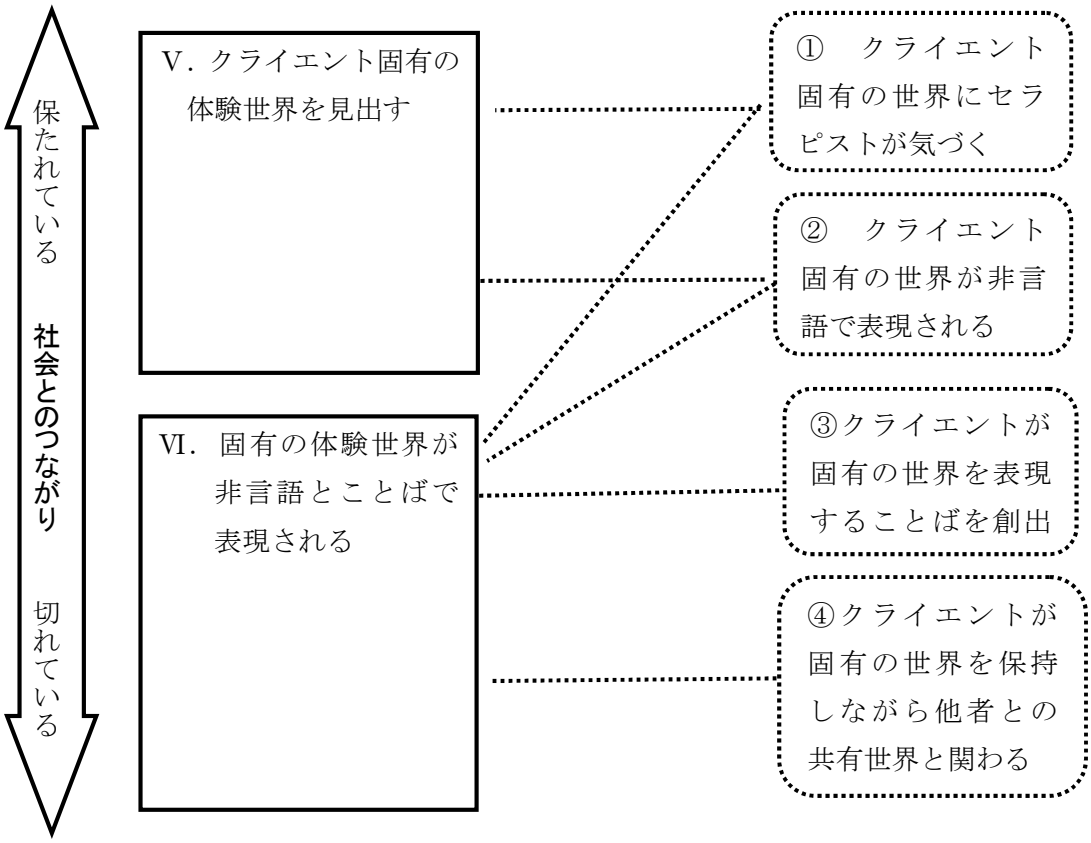
研究の方法については，クライエントの固有の体験世界を対象とする点から，「本質的に個別性をもつ，単純には他と比較し得ない独自な存在としての生活者その人」を対象とする「事例研究法」（藤原，1992）を用いる。

### (3) 事例におけるクライエントの健康度の確認

非言語表現の心理面接への導入については，適応の検討を要する。山中（1992）は，絵画療法について「ノンヴァーバル（非言語的）な方法のうち，もっとも手軽に行えて，かつ大変に有効な方法」と述べ，その適応について説明している。情動的葛藤が問題となっている神経症圏では,「葛藤がイメージ領域にその水路を見出す」ことによって解消される。こころと体の中間領域で生じる心身症では，そこを「存在域とするイメージ」が媒体となってこころと体をつなぐことができる。精神と情動との解離や思考の分裂が生じている統合失調症では,「分裂していた思考や凍結していた情動を賦活し，統合的に働く」ことを促す。しかし，幅広く行える方法ではあるが，一方で，クライエントの状態（病態）によっては，注意も要する。たとえば統合失調症の急性期やうつ病の極期には禁忌である（山中，1992)。非言語表現の適用に限らず，心理面接を始めるにあたって，クライエントの健康度（病態）の見極めは重要である。土居（1996）は，クライエントについて「どこまでがわかってどこまでがわからないかの区別をつけることの重要性」を述べている。

### (4) 本研究の目的

事例研究をもとに，クライエントの固有の世界と一般的世界が調和に至る過程を見出すことを本研究の目的とする。


保たれている
社会とのつながり
切れている
Ⅴ．クライエント固有の体験世界を見出す
Ⅵ．固有の体験世界が非言語とことばで表現される
①　クライエント固有の世界にセラピストが気づく
②　クライエント固有の世界が非言語で表現される
③クライエントが固有の世界を表現することばを創出
④クライエントが固有の世界を保持しながら他者との共有世界と関わる

# 第 Ⅴ 章　　総　　括

実践的研究をもとに，クライエンの固有の体験世界の理解とセラピストのあり方について考察した。面接を通して，クライエントの中でことばと非言語表現はどのような経過をたどり，どのような形の調和に至ったのか，心理面接という場はどのように機能したのか，について総合的考察を加える。

## 1. 総合的考察

### (1) 不適応とは何か

Carl Gustav Jung（1963/1973）は，「孤独は自己の周囲に人がいないために生じるのではなく，自分にとって重要と思えることを他に伝えることができないときか，自分が他人の許容し難い何らかの観点をもつことによって生じてくるものだ」と述べる。孤独は周囲に人がいることによって生じる，という逆説の中に人間は生きている。そして，この「周囲」が多数になればなるほど，そこに属さないものへの「許容し難い」度合いは強まり，「孤独」は深まっていくと想像される。

つまり，孤独を深めていくのは，善悪でも正誤でもなく，多いか少ないかという量の違いとも言える。たとえば，その場にいる多くの人が心地よいと感じる温度が，自分にとって暑すぎたり寒すぎたりすれば，その場にいることが難しくなる。人間の暮らす社会は，そこに生きる多くの人が許容できる共通認識を基に成り立っていると言えよう。そのため，その個人が少数派であればあるほど，社会はその個人を許容し難くなり，その個人にとって社会は適応の難しいものとなる。

不適応ということばのもとに，もともと量の違いであったものが，ともすれば善悪や正誤の判断によるものであるかのように扱われることがある。そうなると，量の違いによって生じた適応の難しさが，あたかも悪いもの，誤ったものであるかのように捉えられてしまう。

### (2) 固有の世界と一般的社会

他者との違いをあってよいものとして捉えることができたとしても，現実社会に適応するためには，ある程度個人の中にある少数派の部分を抑え，多数派である一般的社会に馴化していくことが求められる。多数派への馴化が進めば進むほど，社会の中での適応感も増すことが多い。一方で，Jung（1916/1977）は，人間がある一面だけを発達させて生きることに警告する。「本当に『生きる』ことの出来るためには，この別の一面をも必要とし」，「抑圧されたものは意識化されねばならぬ」「高きは低きを求め，熱は冷を求めるように，あらゆる意識は，それと察することなくして自己の無意識の対立物（これなくしては意識が活動をやめ，化石化してしまうところの）を求める」と述べる（Jung，1916/1977）。社会に馴化した部分だけを生きることによって，抑えられた個の部分は「症状」という形をとって現れると説く。体や心に生じる何らかの不具合は，生きられていない一面の存在によって生じる「個性化」への営みでもある（Jung，1928/1995）。

多数決の世界である一般的社会に適応する一方で，多数決には含められない個人の固有の体験世界を保持し，生きることが求められる。ともすれば，社会の中で認められにくい固有の世界は，その個人にとっても排除すべきもの，修正されるべきものと捉えられやすい。けれども，その固有の世界こそ「個性化」に必須のものである。固有の世界を排除してしまうと，個人は破綻をきたす。多数決の社会に認められにくい固有の部分を，あって良いものとして受け入れていくことが真の適応に向けての第一歩であると考える。

### (3) セラピストの気づき―クライエントを理解するということ

山中（2003b）はクライエントが「関心を向けているものを『窓』と呼び」，「その英訳として window ではなく，channel を充てた」（山中，2003b）。この「窓」を見つけるためには，セラピストが自分の有することばの枠組みに気づき，クライエントがことばで表し得ない体験世界と交信するチャンネルに周波数を合わせることが必要になる。それは面接場面ではどのような作業として始まるのであろうか。

氏原（1992）は，心理面接においてセラピストがクライエントを理解する場合に，「対象としてのクライエント（引用文献では「患者」）を客観的に理解するとともに，そのようなクライエント（同）を前にして，おのずから内に生ずるプロセスに注意しなければならない」と述べる。クライエントの体験していることを理解するには，その身体感覚やそれに伴う感情体験を感じとることが必要となる。氏原（1992）は，その過程を経て「『もし私が今のあなたのような状況にあれば，多分こんなふうに感ずるだろうが，今あなたが感じるそれとはそういうものなのか』と問いかけることができる」と述べる。クライエントを理解するためには，まずセラピスト自身が自らの感覚や体験に開かれ，それを率直に受け取ることが重要であう。

しかし，実際の面接においては，「もし私が今のあなたのような状況にあれば，多分こんなふうに感ずるだろう」という段階において，セラピスト自身の固定観念や感じ方が立ちはだかり，クライエントの言動がどうにも解せない状況に陥ることがある。

セラピストとクライエントの関係，すなわち，セラピストがクライエントを充分に理解できていない自分を受け入れていくことと，クライエントが自らの在り方を受け入れていくことは，parallel process（Ekstein & Wallerstein，1958）に準えて捉えることができる。セラピストが自分を受け入れることとクライエントが自分を受け入れることは相互に作用し，並行して進んでいく関係にあると考えられる。

ここで重要となるのは，セラピストが，クライエントを理解できないことについて，あってはならないことと否定的に捉え，排除しようと努めることではなく，理解でき

ていない自分をセラピスト自身が受け入れることである。それは，クライエントを理解できていないことについて，そのままで良しとするのではなく，クライエントを理解できていない自分の存在を肯定するという意味においてである。

もともと，ひとりの人間の体験をそのままに，すべて理解するということは不可能だろう。誰しも他者とは異なる考えや感性を持ち，豊かな固有の世界を持っている。それが豊かで複雑であればあるほど他者には理解しにくいものとなる。それは，Jung（1963/1973）の述べる「自分にとって重要と思えること」であり「他人の許容し難い何らかの観点」であろう。セラピストがクライエントを充分には理解できていないと感じるのは，裏を返せば，クライエントの背後に豊かな固有の世界があることを感じている，ということでもある。それはクライエントへの畏怖と尊敬につながっていくものであろうと考える。

### (4) セラピストの問いかけ—「社会的所産」としてのことば

セラピストがクライエントとの会話で行なったのは，「抽象の階段を下り」（福沢，1995），より具体的な事実を確かめることであった。クライエントが体験した場面やものごとを知ることで，セラピスト自身がその場に身を置くことに近づき，クライエントの体験をより具体的に想像しようとしたのである。Saussure（1915/1972）の言う「社会的所産」としてのことばによって，クライエントの体験がセラピストに示される過程であるとも言えよう。

### (5) セラピストの気づき—クライエント固有の体験世界にセラピストが触れる

セラピストが，クライエントの固有の体験世界を想像しそこに近づくことができたのち，さらに深く知るために非言語表現が機能した。クライエントが体感している世界について，「～ではない」という差異（Saussure，1915/1972）からではなく，「～である」と指し示す形で，非言語表現は伝えたのである。それらは，バウムテスト，コラージュ，交互スクイグルであった。

そして，最も重要な転回点は，セラピスト自身の固定観念への気づきである。

クライエントの体験世界を理解する，クライエントに共感する，ということばは多用される。しかし，セラピスト自身が自分の概念体系をどこまで見渡せているだろうか。「そこにものがあっても，それを指す適当なことばがない場合，そのものが目に入らないことすらある」(鈴木，1973)のである。天動説から地動説への転換が容易でなかったように，人間は自らの概念体系を揺るがすものに抵抗する。既存の体系が多数決

で成り立っていることから，異なる体系は規格外として排除されやすい。異なる概念体系に触れる機会は非常に稀少なものとなるのである。その稀有な機会を感じ取る「窓」(山中，2003b)を培うことが，セラピストが自身の概念体系に気づく鍵なのであろう。

### (6) クライエントの試み―固有の体験を伝えることば

クライエント固有の体験世界にセラピストがわずかにでも触れ，その存在を実感することは，クライエント固有の世界が他者に開かれたことを意味する。セラピストが周波数を合わせる努力を続けることによって，山中（2003b）の述べる「窓 channel」が姿を現したとも言えるであろう。それはわずかな風穴に過ぎないかもしれないが，他者とつながる通風孔を得た固有の世界は，他者にその世界を伝える手立てを模索する。ことばが Saussure（1915/1972）の言う「社会的所産」としての「言語 *langue*」から一歩広がり，固有の体験世界を表す「《詩的》」（Eliade，1952/1971）な性質を帯びたのである。

### (7) クライエント・セラピスト間の共通語の創出へ

クライエントが固有の体験をことばにすることを可能にした底流には，他者に伝えたいというクライエントのモチベーションの存在が窺われる。クライエントの中にある，他者に伝えることへの能動的志向が，内面をことばにするという試みを生み出すと考えられる。その端緒となったのは，“クライエントの固有の体験世界は現実に存在する”という，セラピストの確信であろう。

クライエントは，「社会的所産」としての「言語 *langue*」（Saussure，1915/1972）を用いて，自分の体験を他者に伝えた。固有の体験がことばで伝達される過程を経て，面接の場におけることばの意味内容が，クライエントとセラピストの間で共有された。クライエントとセラピストの共通語としてのことばが成立したのである。そのことばは，面接の場におけるクライエントとセラピストの二者間のことばではあるが，クライエントが自身の体験世界を伝えることばを得た，ということの意味は大きい。

### (8) 対立物を保持するあり方としての統合―調和―

クライエントは，描画とことばを用いて，自身の体験世界をわずかながらもセラピ

ストに伝え，セラピストとクライエントの間でそれは共有されていった。固有の世界が他者に触れたということは，個を脱し，いくばくかの社会性を帯びたということである。

そこで重要なのは，固有の世界が社会と混ざり合って一体化することを目標としているのではない，ということである。先述のようにJung（1916/1977）は，「あらゆる意識は，それと察することなくして自己の無意識の対立物（これなくしては意識が活動をやめ，化石化してしまうところの）を求める」と述べる。一方を強めれば強めるほど，勾配は急になり，エネルギーは低きを求めて流れ込むことになる。Jung（1956/2000）は，「心理療法の目標は，『精神的統一』，すなわち己れの性格の高きも低きもともに自覚するという包括的認識を呼び覚ますことにある」と述べる。「統一」は，いずれかを排除して１つを選ぶのでもなければ，個々の存在を否定して異なるものにするということでもない。「精神」と「魂」と「肉体」が各々存在しつつ結びつくことを求める。実際の面接場面において，「精神」は意識されている思考を示し，「魂」は無意識を示し，「肉体」は現実の言動を示すと考えられる。そして，それらがその存在意義を失わず，１人の人間の中に調和を保つ道のりが「個性化」の過程であり，面接の目標なのである。

そして，Jung(1956/2000)の述べる「高きも低きもともに自覚するという包括的認識」とは，固有の体験世界を保持しつつ，多数決の社会にも関わるという，二重性を備えたあり方であると考える。

### (9) 容器としての面接の場

対立物の調和を可能にするために不可欠となるのが，面接という場である。Jung(1944/1976)は，心理療法過程と重なる精神作用をもたらすものとして錬金術作業を研究した。その中で，錬金術を行う「容器」の重要性を説いた。錬金術の目指す「結合 *coniunctio*」は，「精神と〔霊〕と魂の統一が，肉体と結合させられることによって達成される」（Jung，1956/2000）のであるが，この作業の「少なからず重要な概念は，ヘルメスの容器（*vas hermetis*）である。これは実質的にはレトルトないし溶解炉であり，変化させるべき物質の容れ物である。それは道具にはちがいないが，『第一資料』および石に対して独特の関係を示しており，その意味で単なる道具なのではない」，「正真正銘の象徴」（Jung，1956/2000）なのである。面接の場は，錬金術作業における容器の役割を果たすと考える。それは，セラピストとクライエントという，他者どうしが相対する場であり，今ここという現実に触れる場でもある。その面接の場が容器となって，クライエントあるいはセラピストの，さまざまな思いや考えである「精神」と内面にある無意識である「魂」と現実の言動である「肉体」が表出され，それぞれの精神と魂と肉体が相互に反応し合っていった。それは，クライエントにお

いても，セラピストにおいても同様であった。さらに，クライエントとセラピストがぶつかり合い，相互に反応し合う場でもあった。そこでは，一方を否定し，粉砕するのではなく，また原型を失って 1 つに融合するのでもなく，個々があってよいとして，尊重されつつ存在することが目指された。

面接の場が「容器」たりうるには，異種異質の材料や試料をその中に抱え，反応を保つことが必要となる。容器におけるセラピストの役割の 1 つは，最初にセラピスト自身が自分とクライエントとの異種性・異質性を認めることであろう。人間は自分が容易に理解できないことがらについて，それは事実ではないとかありえないと判断して収めようとしがちである。自分の既成概念を壊すものの存在自体を排除しようとするのである。そうやって自身の安定を保つ。しかし異なるものを排除すると，当然その先の反応もない。セラピストが自分の固定観念や既成概念と異なる存在や現象を，既知のものとは異なるものとして認め，その存在に目を向けることが，反応を導く端緒となるのである。

「容器」は，外界と容器内に一線を画す。外界から守られた場でもある。外界で排除されることがらが存在しうる場なのである。しかし容器の中では時に異種異質のものが激しく反発し，葛藤や混乱も繰返される。容器は守りと反発という対立的機能が展開する場でもある。セラピストに求められるのは，容易に混ざり合わない異種異質のものを，それぞれの異種性・異質性を良しとして保つことであろう。

## 2. 今後の課題

心理面接における「ことば」と「非言語表現」を対比させ，その役割と相互関係，さらには調和に焦点をおいて論じた。クライエントのコラージュやバウムテスト，交互スクイグルなどの非言語表現は，クライエントの内的体験世界を表現するものとして，ことばによる表現とは異なるという点に重点が置かれた。そのため，セラピストは，それらの非言語表現に積極的に介入するよりも，表現されたものをそのまま受け取るという関与の仕方が中心となった。セラピストから何か応答する場合も，コラージュ事例やバウムテスト事例では，ことばによるものが大半であった。

今後の課題として，心理面接においてクライエントから示された非言語表現そのものを話題の中心に据え，セラピストが能動的にクライエントの内的体験世界に触れていくという関与の仕方も考えられる。それにより，Jung（1928/1995）の中心理論の１つである元型論に基づいて，クライエントの体験世界を捉えることができるかもしれない。自らの内的体験世界と普遍的無意識との関連に触れることは，クライエント自身の体験世界がより多義的な意味を含み，豊かなものになる可能性があると考える。

## 文　献


青木健次（1986）．特集バウムテストの読み方―バウムテスト．家族画研究会(編)．臨床描画研究Ⅰ，68-86．金剛出版．

浅田剛正（2008）．描画法におけるセラピストの主体的関与について　風景構成法を用いた関与の多様性の検討から．心理臨床学研究 26-4，444-454．

Bolander K（1977）．*Assessing Personslity Through Tree Drawings*. 高橋依子（訳）（1999）樹木画によるパーソナリティの理解．ナカニシヤ出版．

土居健郎（1996）．「見立て」の問題性．精神療法 22-2，118-124．

Ekstein, R. & Wallerstein, R. S.（1958）．*The Teaching and Learning of Psychotherapy*. Basic Books．New York.

Erikson, E.H.（1950）．*Childhood and Society*. New York：Norton. 仁科弥生（訳）（1977）．幼児期と社会 1．みすず書房．

Ellenberger，H．F．（1970）．*The Discovery of the Unconscious―The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*. Basic Books Inc．木村敏・中井久夫（監訳）（1980）無意識の発見―力動精神医学発達史　上下巻．弘文堂．

Eliade，M．（1952）．*Images et Symboles，Essais sur le symbolisme magico-religieux*. 前田耕作（訳）（1971）．エリアーデ著作集　第四巻　イメージとシンボル．せりか書房．

Ellis，A．＆Ellis，D．J．（2011）．*Rational Emotive Behavior Therapy*. Theories of Psychotherapy Series．Washington，DC．American Psychological Association.

藤田晶子（1997）．一般慢性分裂病者にみられたコラージュ表現．日本芸術療法学会誌, 28-1, 77-82.

福沢周亮（1995）．放送大学教材　改訂版　言葉と教育．放送大学教育振興会．

長谷川早苗（2003）．統合失調症のコラージュ過程．箱庭療法学研究，16-2，　43-56.

橋本秀美（2007）．描画の専門家が描画から共感性を捉える視点についての研究―描画の肯定・否定感情に対する共感性の違いに着目して．臨床描画研究 22，151-168.

橋本やよい（1998）．母親面接の Narrative について．心理臨床学研究 15-6，623-634.

Hayakawa，S．I．（1972）．*Language in Thought and Action（3rd Edition）*．Harcourt, Brace Jovanovich，inc．New York．大久保忠利（訳）（1985）思考と言語における言語原書第 4 版　S．I．ハヤカワ著．岩波書店．

林知代（2005）．ひきこもりの息子をもつ母親との心理療法過程　代理内省としての共感による断片化した情動統合へのプロセス．心理臨床学研究 23-2，185-196.

羽間京子（2002）．治療的 Splitting について　非行少年の事例を通して．心理臨床学研究 20-3，209-220.

東山紘久（1992）．心理療法の基礎問題．河合隼雄（監修）岡田康伸・田畑治・東山紘久（編）臨床心理学（第 3 巻）―心理療法．創元社．
東山紘久（2005）．心理面接学　その歴史と哲学．大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦（監修）臨床心理学全書 3．誠信書房．
藤原勝紀（1992）．臨床心理学の方法論．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 1 部．培風館．pp．13-17．
一丸藤太郎（2003）．臨床心理実習 1－スーパーヴィジョン．大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦監修　臨床心理学全書４　下山晴彦編　臨床心理実習論　第８章. 誠信書房.
今井むつみ（2010）．ことばと思考．岩波書店．
今村友木子（2001）．分裂病患者のコラージュ表現－枠の効果に関する検討－．日本芸術療法学会誌 32-2，14-25．
井上尚美・福沢周亮（1996）．国語教育・カウンセリングと一般意味論．明治図書出版．
石川元（1983）．家族絵画療法．海鳴社．
石川敬子（2003）．心理療法における「芸術表現」の意味．心理臨床学研究 21-5，508-519．
石崎淳一（2001）．コラージュに見る痴呆高齢者の世界．心理臨床学研究 19-3，　278-289．
岩井寛（1981）．描画による心の診断－子どもの正常と異常をみるために－．日本文化科学社．
Jaspers, K.（1913）. *Allgemeine Psychopathologie*. Verlag von Julius Springer, Berlin. 西丸四方（訳）（1971）カール・ヤスパース精神病理学原論．みすず書房
Jung，C．G．（1916）．*Uber die Psychologie des Unbewussten*．高橋義孝（訳）（1977）無意識の心理．人文書院．
Jung，C．G．（1928）．*Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem UnbewnSten.* Darmstadt，Reich．松代洋一・渡辺学（訳）（1995）自我と無意識．レグルス文庫．
Jung，C．G．（1935）．*Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem UnbewnSten.* Switzerland.
Jung, C. G.（1944）. *Psychologie und Alchemie. Zurich*. 池田紘一・鎌田道生（訳）（1976）心理学と錬金術Ⅰ．Ⅱ．人文書院．
Jung，C．G．（1953）．*Psychology and Alchemy.*（*The Collected Works of C．G．Jung*, vol．12．Ed．by Herbert Read et al：princeton University Press）．
Jung, C. G.（1955）. *Mysterium Coniunctions－Untersuchungen uber die Trennung und Zusammensetzung der seelischen Gegensatze in der Alchemic*. 池田紘一（訳）（1995）結合の神秘Ⅰ．人文書院．
Jung, C. G.（1956）. *Mysterium Coniunctions－Untersuchungen uber die Trennung und Zusammensetzung der seelischen Gegensatze in der Alchemic*. 池田紘一（訳）（2000）結合の神秘Ⅱ．人文書院．
Jung，C．G．（1963）．*Memories，Dreams，Reflections* by C．G．Jung．Recorded and

Edited by Aniela Jaffe，Pantheon Books．河合隼雄・藤縄昭・出井淑子（共訳）（1972）A．ヤッフェ編　ユング自伝 1．みすず書房.

Jung，C．G．（1963）．*Memories, Dreams, Reflections* by C．G．Jung．Recorded and Edited by Aniela Jaffe，Pantheon Books．河合隼雄・藤縄昭・出井淑子（共訳）（1973）A．ヤッフェ編　ユング自伝 2．みすず書房.

Jung，C．G．（1963）．*Mysterium Coniunctionis.*（*The Collected Works of C．G．Jung*, vol．14．Ed．by Herbert Read et al：princeton University Press）.

Jung，C．G．（1967）．*Paracelsus as a Spiritual Phenomenon*（*The Collected Works of C．G．Jung*, vol．13．Ed．by Herbert Read et al：N．J．：princeton University Press；2nd edition）．松田誠思（訳）（2002）．ユング錬金術と無意識の心理学．講談社.

Jung，C．G．（1971）．*Psychological types.*（*The Collected Works of C．G．Jung*, vol．6．Ed．by Herbert Read et al：princeton University Press）.

神村栄一（2011）．認知行動療法による社交恐怖治療の工夫．精神療法，37-4，412-417.

笠原嘉（1977）．青年期．中公新書.

河合隼雄（1967）．ユング心理学入門．培風館.

河合隼雄（1991）．イメージの心理学．青土社.

河合隼雄（1993）．特集にあたって　心理療法とことば．精神療法　第 19 巻第 1 号，3-6.

河合隼雄（1998）．無意識の構造．中央公論社.

河合隼雄（2000）．イメージと心理療法．河合隼雄（編）・徳田完二・渡辺雄三・田中康裕・織田尚生（著）講座心理療法第 3 巻　心理療法とイメージ．岩波書店.

木村重信（1971）．はじめにイメージありき．岩波書店.

岸本寛史（2007）．表現としての描画．臨床心理学 7(2)，　151-157．金剛出版.

Koch，K．（1957）．*Der Baumtest．3．Auflage Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel.* 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）（2010）カール・コッホ　バウムテスト[第 3 版]－心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究．誠信書房.

小俣和義（2011）．強迫症状を呈した小学生女児とその母親へのかかわり―同一セラピストによる母子同席面接と並行母親面接の併用事例．心理臨床学研究 28-6，705-716.

厚生労働省（2010）．ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.

小杉正太郎（2002）．ストレス心理学．川島書店.

蔵本信比古（2008）．社会的ひきこもりに関与する心理的特性の検討．心理臨床学研究，26-3，314-324.

栗原和彦（1992）．治療構造論．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 3 部．培風館．pp．213-216.

楜澤令子（2010）．母子の育ちなおしのプロセス　精神疾患をもつ親の子育て支援．心理臨床学研究 28-4，401-411.

間藤侑（2000）．思春期・青年期の心理臨床的問題．岡堂哲雄（編）．臨床心理学(第 2 版) 第 3 章 C．日本文化科学社．
丸山圭三郎（1983）．ソシュールを読む．岩波書店．
丸山圭三郎（2008）．言葉とは何か．筑摩書房．
三好暁光（1992）．健康と病態―心の問題―．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 1 部．培風館．pp．41-45．
森谷寛之（2005）．コラージュ療法．精神療法，31 (6)，682-687．
村瀬嘉世子(2000)．子どもの心理臨床の今日的課題．安香宏・村瀬孝雄・東山紘久（編）．臨床心理学体系　第 20 巻　子どもの臨床　第Ⅰ－1 章．金子書房．
鍋谷恭孝（1997）．対人恐怖・醜形恐怖．金剛出版．
中井久夫（1973）．精神分裂病の寛解過程における非言語的接近法の適応決定．芸術療法，4，13-25．
中井久夫（1974）．枠付け法覚え書．芸術療法 5，15-19．
中井久夫（1985）．“芸術療法”の有益性と要注意点．中井久夫著作集 2 巻治療．岩崎学術出版社．176-187．
中井久夫（1993）．コラージュ私見．森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕（編）コラージュ療法入門．創元社．
中井久夫（2009）．対人援助の技とこころ．臨床心理学　増刊第 1 号，151-157．金剛出版．
中根晃（1999）．発達障害の臨床．金剛出版．
中島ナオミ（2010）．バウムの発達．臨床心理学 10-5，668-673．金剛出版．
Naumburg, M.（1966）. Dynamically Oriented Art Therapy：Its Principles and Practice. Grune & Stratton，inc.，New York．中井久夫（監訳）内藤あかね（訳）（1995）力動指向的芸術療法．金剛出版．
西村良二・上里一郎（1990）．心理療法について．上里一郎・鑪幹八郎・前田重治（編）臨床心理学体系第 8 巻　心理療法②　第一章．金子書房．
西園昌久（2011）．対人恐怖・社交恐怖と「恥」の文化―その時代的変遷―．精神療法，37-3，265-271．
岡昌之（2003）．イメージと言葉を生かす知恵．臨床心理学 3-2，155-159．金剛出版．
Storr，A．（1973）．*C. G. Jung*，Fontana/Collins Inc．河合隼雄（訳）（2000）ユング A．ストー．岩波書店．
岡村宏美（2011）．面接前に描かれるバウムテストの意味．岸本寛史(編)　臨床バウム―治療的媒体としてのバウムテスト．誠信書房．
岡村裕美子（2009）．繰り返される言葉に耳を傾ける意味．心理臨床学研究，27-3，301-311．
大原健士郎（1987）．森田療法―理論と実際―．金原出版．
李敏子(1992)．象徴．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 1 部．培風館．pp．1014-1015．

Rogers，C．R．（1942）．*The Closing Phases.* 佐治守夫（編）友田不二男（訳）（1966）終結時の諸様相．ロージァズ全集　第 2 巻　カウンセリング　第 3 部第 8 章．岩崎学術出版社，pp.271-298.

Rogers，C．R．（1957）．*The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change.* Journal of Consulting Psychology，21-2．伊東博（訳）（1966）パースナリティ変化の必要にして十分な条件．伊東　博(編訳)．ロージァズ全集　第 4 巻　サイコセラピイの過程　第 2 部　第 6 章．岩崎学術出版社，pp．117-140.

佐渡忠洋（2010）．日本におけるバウムテストの研究．臨床心理学 10-5，674-679．金剛出版.

齊藤万比古（2009）．発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート．学研教育出版.

里見聡 (2011)．心理臨床面接がもつ間主観性に関する一考察　スクィグル・ゲーム, MSSM 法を用いて．心理臨床学研究 29-1，97-108.

Saussure，F．de．（1910）．*3`eme Cours de Linguistique Generale by Ferdinand de Saussure Editorial Copyrights 1910 by Maurice Constantin.* 影浦峡・田中久美子（訳）（2007）ソシュール　一般言語学講義　コンスタンタンのノート．東京大学出版会.

Saussure, F. de.（1915）. *Ferdinand de Saussure Cours De Linguistique Generale publie par Charles Bally et Albert Sechehaye.* 小林英夫（訳）（1972）フェルディナン・ド・ソシュール　一般言語学講義．岩波書店.

Saussure，F．de．（1957）．*Ferdinand de Saussure ：DEUXIEME COURS DE LINGUISTIQUE GENERALE（1908-1909）INTRODUCTION.* edite，annote et preface par Robert GODEL professeur a l'universite de GENEVE．山内喜美夫（訳）（1971）ソシュール言語学序説．勁草書房.

Saussure，F．de．（1997）．*Ferdinand de Saussure ：DEUXIEME COURS DE LINGUISTIQUE GENERALE（1908-1909）（d'apres les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois）．Texte francais，edite par Eisuke Komatsu.* 相原奈津江・秋津伶（訳）（2006）フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第二回講義（1908-1909 年）リードランジェ／パトワによる講義記録．エディット・パルク.

関則雄（1998）．集団絵画療法の実際．徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕（監集）芸術療法 2 実践編，36-45．岩崎学術出版社.

新村出（編）（1998）．広辞苑　第五版．岩波書店.

塩崎尚美 (2003)．バウムテストの解釈 vol．Ⅴ-2(3)　心理療法の過程で行うバウムテストーメッセージをいかに読みとるか．臨床心理学 3-5，717-722．金剛出版.

杉嶋洋子（2010）．長男のひきこもりを主訴とする両親との面接事例報告．聖徳大学心理教育相談所紀要第 8 号，43-49.

杉嶋洋子（2011）．表現補助としてのコラージュの試み―デイケアで社会復帰につながった 1 事例を通して．臨床描画研究 26，166-181.

杉嶋洋子（2013）．ことばにされないものの表現としてのバウムテスト．心理臨床学研究 31-3，488-499.
杉嶋洋子（2014）．母親面接事例から考察したセラピストに求められる自分自身への気づき．心理臨床学研究 32-2，172-182.
杉嶋洋子（2015）．ことばと異なる体系の世界を描出した交互スクイグル．心理臨床学研究 33-1，26-36.
鈴木孝夫（1973）．ことばと文化．岩波書店.
首藤祐介（2011）．強迫症状を示す児童への母親を主たる実施者とした認知行動療法アプローチ．心理臨床学研究 28-6，729-739.
高江洲義英（1998）．集団精神療法と芸術療法．徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕（監集）芸術療法 1 理論編，56-66．岩崎学術出版社.
徳田良仁（1998）．絵画療法の各種技法の理論と展開．徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕（監集）芸術療法 1 理論編，175-183．岩崎学術出版社.
高橋雅春・高橋依子（1986）．樹木画テスト．文教書院.
高橋昇（2000）．病院臨床―5.デイケア．氏原寛・成田善弘（編）．臨床心理学 3 コミュニティ心理学とコンサルテーションリエゾンー地域臨床・教育・研修ー．培風館.
高橋依子（2007）．描画テストの PDI によるパーソナリティの理解－PDI から PDD へー．臨床描画研究 22，85-98.
高野久美子（2006）．教育相談所での取り組み．精神療法 32-4，427-433.
高野佳也（1998）．精神科リハビリテーション―精神科デイケア・SST・心理教育．小此木啓吾・深津千賀子・大野裕（編著）．心の臨床家のための必携　精神医学ハンドブック．創元社.
滝口俊子（1990）．自閉傾向児の母親面接　コメント 2．河合隼雄（編著）事例に学ぶ心理療法　第五章．日本評論社.
田中富士夫（1992）．投影法．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 4 部．培風館．pp．515-519.
田中康裕（2000）．分析心理学における錬金術のイメージと論理．河合隼雄（編）・徳田完二・渡辺雄三・田中康裕・織田尚生（著）講座心理療法第 3 巻　心理療法とイメージ．岩波書店.
寺沢英理子（2006）．絵画療法の橋渡し機能．心理臨床学研究，24-2，153-165.
徳田良仁（1998）．絵画療法の各種技法の理論と展開．徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕（監集）芸術療法 1 理論編，175-183．岩崎学術出版社.
恒吉徹三（2003）．母親面接における面接者－来談者関係　「反復」としての視点．心理臨床学研究 21-4，398-409.
津島豊美（2005）．パラレルプロセスの気づきと理解は治療者にどう影響するかースーパーヴィジョン体験から学んだことー．精神分析研究 49-2，162-170.

植山起佐子（2011）．教育領域から臨床心理学の発展に向けて．臨床心理学第 11 巻第 1 号 金剛出版.
氏原寛（1992a）．臨床心理学の目的と意図．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 1 部．培風館．pp．2-6.
氏原寛（1992b）．臨床心理学基礎論．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 1 部．培風館．pp．36-40.
Winnicott，D．W．（1964）．*The Squiggle Game*．牛島定信監訳・倉ひろ子（訳）（1998）ウィニコット著作集 8 精神分析的探求 3 子どもと青年期の治療相談．岩崎学術出版社.
Wittgenstein，L．（1961）．*Notebooks 1914-1916*．Basil　Blackwell．奥雅博（訳）草稿 1914-1916．ウィトゲンシュタイン全集 1．大修館書店.
牛島定信（2000）．最近のひきこもりをどう考えるか．精神療法，26-6，543-548.
藪添隆一（1992）．終結．氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　第 3 部　1［5-14］．培風館．pp．223-225.
山愛美（2006）．事例について言葉にすることの意味．心理臨床学研究，24-5，537-547.
山口昌男（2000）．文化と両義性．岩波書店.
山中康裕（1992）．芸術療法―絵画療法・音楽療法．河合隼雄（監修）岡田康伸・田畑治・東山紘久（編）臨床心理学（第 3 巻）―心理療法．創元社.
山中康裕（1998）．個人心理療法(精神療法)と芸術療法．徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕（監集）芸術療法 1 理論編，39-52．岩崎学術出版社.
山中康裕（2003a）．こころと精神のはざまで　4 絵画療法論考―その 2―絵画療法の展開．臨床心理学 3-4，533-539．金剛出版.
山中康裕（2003b）．こころと精神のはざまで　5「内閉論」の展開．臨床心理学 3-5，683-688．金剛出版.
山﨑玲奈（2008）．スクィグル・ゲームのなぐり描き線に内在するはたらきについて　臨床事例に根ざした実証的研究を手がかりとして．心理臨床学研究 26-1，59-71.
矢野のり子（2006）．「母子並行面接」から「個人面接」へと移行した母親との面接過程―アレキシシミア心性から二者性感情交流実現の展開．心理臨床学研究 24-5，583-594.